

常澄村埋蔵文化財調査報告 第2集

# 大串貝塚

1986

常澄村教育委員会

## 序

本村の文化財の中で、唯一の国指定を受けているのが、史跡・大串貝塚です。今回、この指定地区に隣接する民有地から、多量の貝層が発見され、話題になりました。

この民有地には、以前から広い範囲にわたり貝殻の散布がみられ、指定は受けないまでも、包蔵地として確認されるところでありました。しかしながら、地下に埋蔵されているものであり、その範囲が不明確で、今回、国の補助を受けて調査を実施いたしました次第であります。

この貝塚は、昭和10年代にも調査が実施され、縄文時代前期の貝塚であることや、折居神社を中心として三地点に貝殻が分布することが確認されておりました。

現在、国の指定地となっているのがC地点と呼ばれるものであり、常澄中学校の校庭をA地点、今回発掘地がB地点とされております。

今回は、B地点の隣接地で土留め工事中に貝層を発見したのですが、今後、一層の保護・保存をはかる上での、範囲明確化の調査ということで実施いたしました。

調査の結果、多数の縄文時代の遺物等この地域における古代人の生活の一端を知る上での、貴重な資料を得ることができましたが、今後、この調査結果が、これら埋蔵文化財の保護・保存対策を図るための貴重な資料として、十分活用していただければ幸いに存じます。

最後に、本調査と報告書の作成にあたり、ご尽力いただいた川崎純徳氏はじめ、調査員の方々、全面的にご支援とご指導をいただいた県教育庁文化課、並びに水戸教育事務所の方々、及び多大なご協力をいただいた関係地主の方々や調査、整理に従事されました皆様方に深く感謝を申し上げます。

昭和61年3月

常澄村教育委員会

教育長 渡 辺 茂 昌

## 例 言

1. 本書は茨城県東茨城郡常澄村大串貝塚の発掘調査報告書である。
2. 本貝塚の発掘調査は昭和60年8月17日から同年9月4日まで実施した。
3. 本貝塚の調査は貝塚の範囲確認を主目的とし、常澄村教育委員会が国庫補助および県費補助を受けて実施した。

4. 調査団の組織は次の通りである。

主 体 者	渡辺 茂昌 (教育長)
団 長	清水 正夫 (社会教育課長)
事 務 局	川井 融顕 (社会教育係長)
調 査 員	川崎 純徳 (県立水戸農業高等学校教諭)
調査補助員	久保田秀雄 (村立常澄中学校教諭)
	安島 孝博 (村立常澄中学校教諭)
	鈴木 素行 (明治大学大学院)
	吹野富美夫 (立正大学大学院)

5. 遺物整理は川崎・鈴木・吹野がおこない、本書は、「Ⅱ．大串貝塚B<sub>1</sub>地点の調査」を鈴木が、「Ⅲ．遺物」の「1.土器」と「2.石器」の一部を吹野が、それ以外を川崎が執筆した。

6. 本調査および遺物整理については次の方々の協力を得た。

宮内 良隆 (取手市教育委員会)	鴨志田篤二 (勝田市教育委員会)
金子 浩昌 (早稲田大学)	高根 信和 (茨城県立歴史館)
佐藤 正好・川井 正一 (茨城県教育財団)	小池 裕子 (埼玉大学)
稲田 均・鷺尾 政市・立石 尚之・野口 享治	

7. 調査および整理参加者は次の通りである。

吉川寛・宮崎文雄・久保田浩・宮部熊次郎・池田くに・飛田かつ・飛田信子  
桧山とり・大和田照子・伊勢山よし・市毛千恵子・佐々木賀津江・薮和子

8. 遺物はすべて常澄村教育委員会に保管されている。

# 目 次

序

例言

I. 大串貝塚の概要	1
1. 自然環境	1
2. 大串貝塚研究史	3
3. 調査の目的	5
4. 調査の方法	7
5. B <sub>2</sub> 地点の調査	8
II. 大串貝塚B <sub>1</sub> 地点の調査	10
1. 調査の概要	10
2. 貝層の堆積	10
3. 貝層下の遺物包含層	15
4. S29層上面の炉址と獣骨の分布	16
5. 貝層の分析	18
6. 貝の種類と検出状況	20
III. 遺物	26
1. 土器	26
2. 石器	38
3. 骨角器・貝器	43
まとめ	46

挿図目次

第1図 大串貝塚付近の地形図	1
第2図 大串貝塚地形測量図	3
第3図 大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ設定図	6
第4図 大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ15～25区東壁セクション図	12
第5図 大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ18～24区西壁セクション図	13
第6図 S29層中で検出されたマガキ	16
第7図 S29層上面炉址実測図	16
第8図 大形破片にみる獣骨の垂直分布状況	17
第9図 ヤマトシジミの殻長・殻高分布	19

第10図	ヤマトシジミにみる焼けた痕跡を有する貝の比率	19
第11図	S25層下部もしくはS26層上面で検出されたクロアワビ	22
第12図	大串貝塚出土土器実測図(1)	27
第13図	大串貝塚出土土器実測図(2)	28
第14図	大串貝塚第32層・第20層出土土器拓影図	29
第15図	大串貝塚第V層群出土土器拓影図	29
第16図	大串貝塚第IV層群出土土器拓影図	32
第17図	大串貝塚第III層群出土土器拓影図	34
第18図	大串貝塚第I・II層群出土土器拓影図	36
第19図	大串貝塚第11層出土土器拓影図	36
第20図	大串貝塚出土石器実測図	39
第21図	大串貝塚出土石器・貝輪実測図	41
第22図	大串貝塚出土骨角器実測図	42
第23図	大串貝塚出土貝刃実測図	43

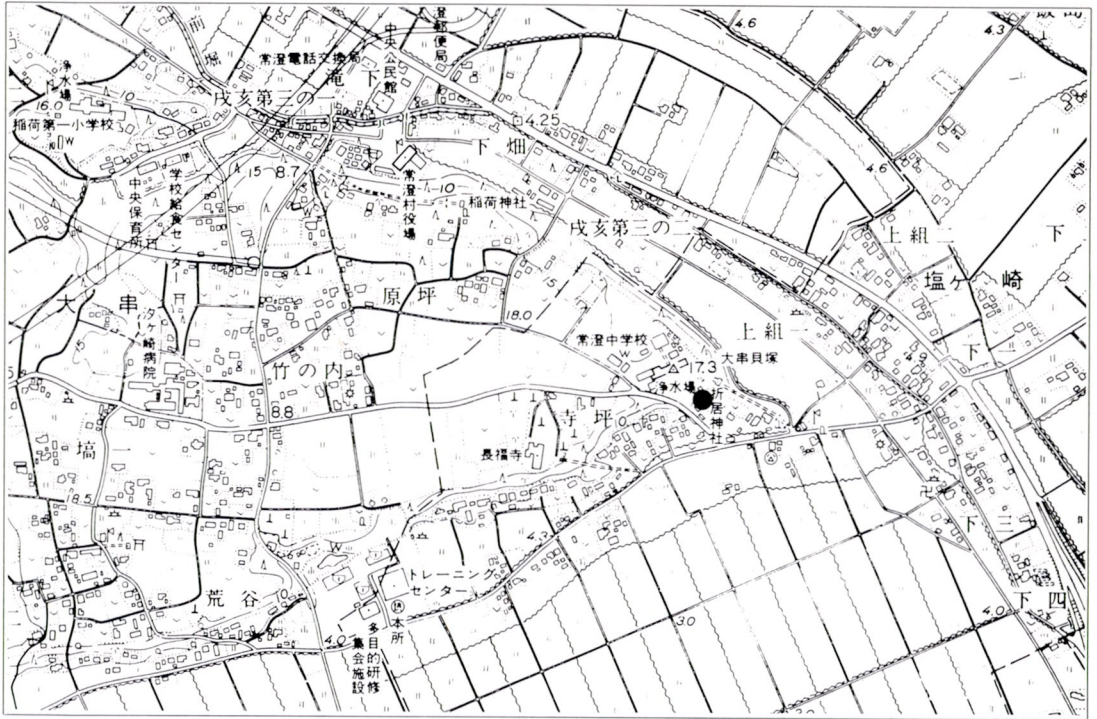
#### 表目次

第1表	貝殻重量に基づく貝種組成比率	18
第2表	大串貝塚出土石鏃・剝片利用石器一覧表	40
第3表	大串貝塚各層出土石材別一覧表	45

#### 図版目次

図版1	大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ18～25区遠景	49
図版2	大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ18～25区近景	49
図版3	大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ18～23区東壁セクション	49
図版4	大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ20～24区西壁セクション	50
図版5	大串貝塚B <sub>1</sub> 地点トレンチ15～18区東壁セクション	50
図版6	大串貝塚出土実測土器	51
図版7	大串貝塚第32層・第20層出土土器	51
図版8	大串貝塚第V層群出土土器	52
図版9	大串貝塚第IV層群出土土器	52
図版10	大串貝塚第III層群出土土器	53
図版11	大串貝塚第I・II層群出土土器	54
図版12	大串貝塚第11層出土土器	54
図版13	大串貝塚出土石器	55
図版14	大串貝塚出貝刃	56
図版15	大串貝塚出土骨角器	56

## I. 大串貝塚の概要



第1図 大串貝塚付近の地形図

### 1. 自然環境

大串貝塚は茨城県東茨城郡常澄村大串に所在する。この貝塚をのせる台地は常総台地の北端に属する水戸台地であり、海拔約30mを測る。水戸台地は那珂川の侵蝕作用によって八溝山地から分断されて形成された台地形であり、那珂川を挟んで対岸に那珂台地が展開している。水戸台地は東側を涸沼川、北側を那珂川の侵蝕をうけているために崖面は急崖をなしている。台地縁辺部は縄文時代以来の各時代の遺跡が集中しているが、これは常澄村内においても例外ではない。

水戸台地は涸沼川の侵蝕をうけて太平洋岸にそって海岸段丘を分離させている。涸沼川は広い氾濫原を有し、ここは現在県内有数の水田地帯となっている。氾濫原の幅は約1kmにも達している。水戸台地から侵蝕によって切り離された大洗海岸段丘は太平洋にそって帯のように発達している。その段丘幅は約500mを測り、侵蝕作用によって起伏にとんだ地形を形成している。海拔38～35mを測り、早くから段丘面は人々の

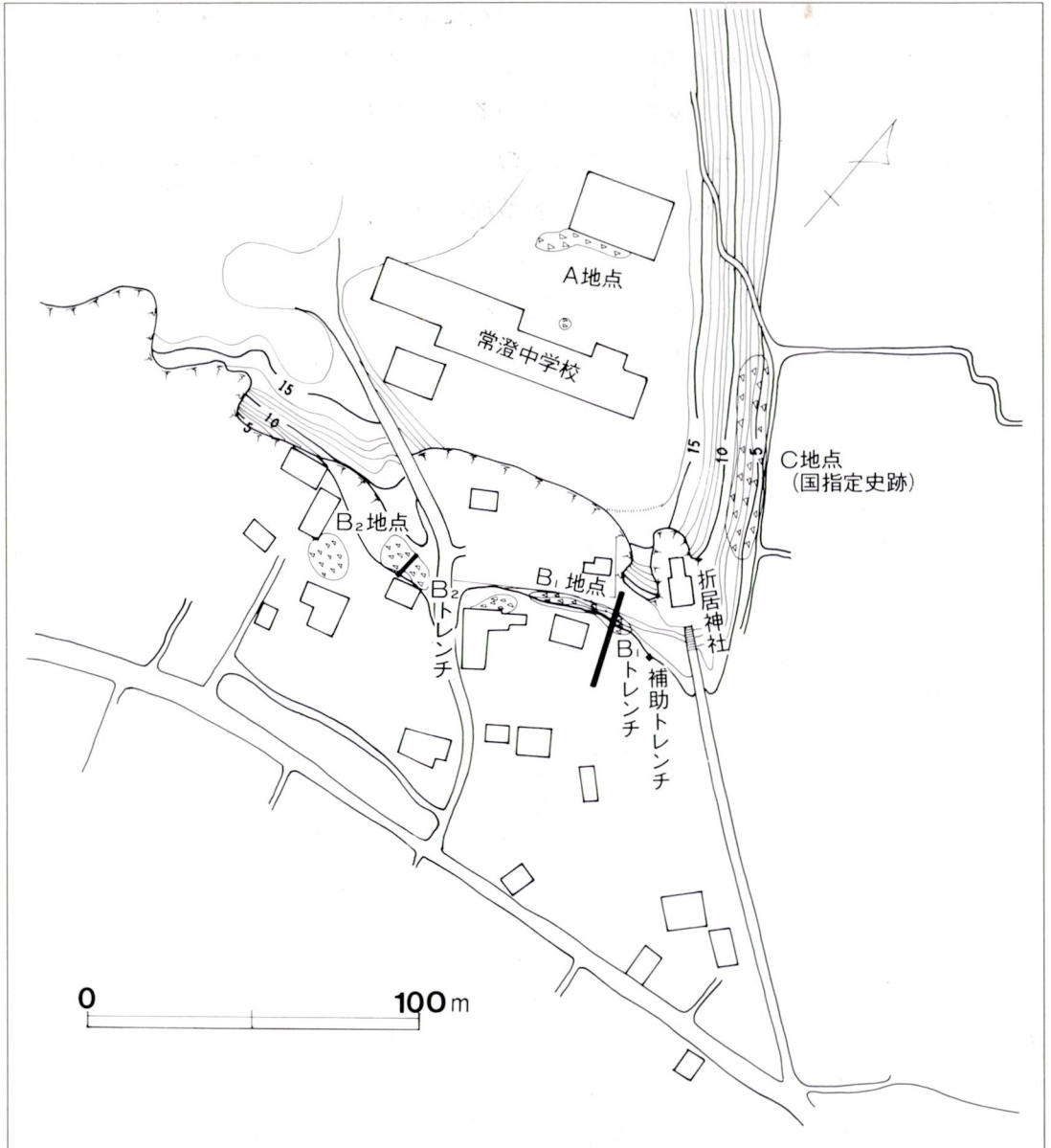
居住地となっており、縄文時代の遺跡群が重複して発見されているのである。

大串貝塚をのせる台地の本来の形については不明確の部分が多い。例えば我々がC地点と呼んだ国史跡のエリアについても台地崖面の傾斜はつよいのであるが、貝層は台地裾に形成されているように、居住と生業の関係を貝層を介在させて理解することは困難なように思われる。A、B地点については段丘状のフラットな部分が存在したのかも知れないが確実な形で居住地を想定するフラット面の存在をここで主張することは出来ない。

さて、大串貝塚をのせる台地は台地縁辺部に近づくにつれて海拔高度を下げ、常澄中学校付近では約18mである。その一角に大山史前学研究所が調査したA地点がある。この付近からは早期田戸下層式土器の出土が伝えられている。しかし、包蔵地のほとんどは常澄中学校の建築のさいに損壊を受けた模様である。即ち、台地上に当る中学校付近に居住地があった可能性がつよいのであるが、今日それを実証することは出来ない。大串貝塚は台地の裾部（海拔約5m）から沖積低地にかけて形成されており、貝層下に獣骨等を焼いたとみられる痕跡もあるところから、ここで調理等がおこなわれていた可能性がつよいのであるが、急斜面という地形的制約によって、居住空間としては不適であることは言をまたない。

調査によって貝層は台地裾部の洪積世面に形成され、その一部分は流れて沖積面に及んでいる。このために沖積低地中にも土器および貝殻あるいは植物質遺物が広く検出されている。沖積土は腐植した有機物を含有するもので、所謂泥炭に近い様相を示している。このような層が砂泥層上にとっているところから、縄文前期の海進時に形成されていたのかも知れない。一般的に当該期は泥炭を主成分とする所謂繊維土器に象徴されるように低地面に生業活動の拠点があったとみられるところから、こうした腐植土内の遺物包含については十分に注意を払う必要があるといえよう。このことは大串貝塚における貝層と同等の重要性を持つものであることを強調しておきたいと思う。当時の環境復元の基礎資料を包含するものであり、本格的な調査、研究が国あるいは県の手で継続されることを熱望するものである。

大串貝塚の形成時に、大串貝塚の前面に展開する沖積地は満潮時には海水の影響をストレートに受け、その砂泥質の水域にはヤマトシジミが繁殖し、ボラ、スズキ、クロダイ、カレイ、マルタなどの汽水域から鹹水域に棲息する魚類が豊富に捕獲されたことであろう。大串貝塚の形成された場所は縄文前期にあっては絶好の生活立地を持っていたものと推測することが出来るのである。



第2図 大串貝塚地形測量図

## 2. 大串貝塚研究史

大串貝塚はわが国を代表する縄文前期の貝塚である。とりわけ縄文前期の花積下層式土器を出土する貝塚としては数少ない貝塚であり、しかも厚い貝層を有する大規模な貝塚として多くの研究者の注目を集めてきた。しかし、本貝塚は発掘調査はそれほど大規模におこなわれたこともなく、そのことがかえって良好な保存状態を保って今日まで残されてきたといえるのかも知れない。

那珂川流域は霞ヶ浦・北浦沿岸について県内における貝塚密集地域として知られて



いるが、そのほとんどは縄文前期に属し、現在13余箇所の貝塚が発見されている。しかも、その多くは縄文前期前半期の、いわゆる「繊維土器」の時期のものであり、いずれも規模の小さな地点貝塚を特徴としている。その中で大串貝塚は最も規模が大きい。このうち花積下層式土器を出土するものは那珂湊市道理山貝塚があるにすぎない。県内においては当該期の貝塚としては東茨城郡小川町野中貝塚と共に広く知られている。

貝塚の調査はこのところ本格的には実施されていない。かつて貝塚は骨角器などの遺物検出を目的にして実施されてきたが、今日の考古学的調査の進展と共に、従来型の発掘では解決できない問題が多く、次第に調査そのものが困難になってきた。すなわち貝塚の調査には動物学、植物学、地質学など多くの自然科学分野の研究者の参加なくしては、研究が必要としている情報の収集が不可能になってきたからであった。発掘調査は貝塚の構造や地形との有機的な関連で捉えなければならないし、貝類や魚骨・獣骨の単なる種類の同定だけではなく、その成育度や捕獲時期など様々な課題に対して科学的な解答を引き出せるような体制でとりくまなければならないのである。

大串貝塚は現在、数地点に貝層が散布している。大山史前学研究所による発掘調査によって、貝層の分布はA、B、C地点の3箇所に整理され、今日これが踏襲されてきた。

B地点は南側斜面であり、今回の調査区である。この地区は戦後、酒詰仲男氏によって一部分が調査されているが、多くの研究者はこの地点については学校敷地になっていたこともあって、湮滅したものとしてあまり注目していなかった様である。しかし、実際には大串貝塚の中では最も遺存度が良く、厚い貝層を残しているように思われる。

A地点は村立常澄中学校の敷地となっている。ここは今日ほぼ湮滅の状態にある。C地点は台地東側の斜面にあり、現在は国の史跡指定をうけている。大山史前学研究所はC地点及びB地点について発掘調査を実施している。

大串貝塚の貝層の分布状況につきては茨城県歴史館（県史編さん委員会）によって実測されている。この実測によって、A地点は2ヵ所の貝層から成り、B地点も二つの小貝塚によって構成される。またC地点も、いくつかの小貝塚群から成るものと思われる。

B地点貝塚は道路を挟んで東側をB<sub>1</sub>地点、西側をB<sub>2</sub>地点と仮称しておくことにしよう。B<sub>1</sub>地点は厚さ1.5mの貝層堆積を有し台地斜面部から裾部にかけて形成されている。裾部は住宅建設によって削土されてしまい、貝殻が広い範囲に散乱している。

今回はB<sub>1</sub>地点に主トレンチと補助トレンチを設定した。

県道を挟んだ地点をB<sub>2</sub>地点と仮称したい。本地点は小貝塚群が群集しており、現在でも3～4箇所の小貝塚が認められるが、その具体的構造については不明である。酒詰仲男氏の調査がおこなわれた地点である。今回、その一角に小トレンチを一箇所設定して貝層の平面的分布の追跡を試みたが、貝層そのものについては掘り下げなかった。

A地点については2箇所の小貝塚が大山史前学研究所によって確認され、そのうちの1箇所が調査されている。また、C地点についても大山史前学研究所による調査がおこなわれ報告がおこなわれている。しかし、これらの発掘は貝層以外に目が向けられていないために、遺物包含層のひろがりを含む大串貝塚の基本的な構造については明らかにされなかった。

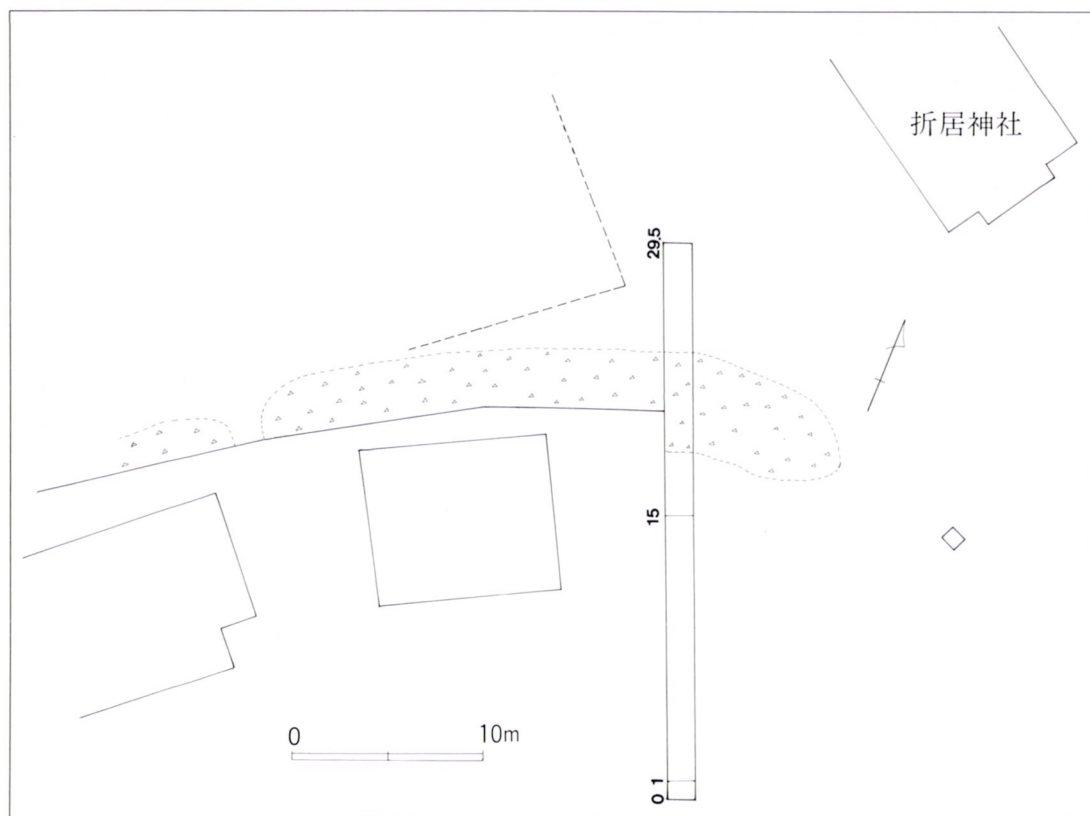
参考文献 田沢金吾、大場磐雄、池上啓介、宮崎紘、「大串貝塚」史前学雑誌9巻2号、昭和12年

酒詰仲男、広瀬栄一「茨城県東茨城郡大串貝塚調査報告」日本考古学1—5、昭和25年

茨城県「茨城県史料 考古資料編（先土器、縄文時代）」昭和57年

### 3. 調査の目的

大串貝塚は縄文前期貝塚としては貝層の分布が広範に及び、かつ厚い堆積を有しているために編年研究だけではなく集落研究などの上でも重要な位置を占めているといえよう。このために、早くから研究者の注目を集め田沢金吾、大場磐雄、池上啓介、宮崎紘の各氏らによる調査（『大串貝塚』史前学雑誌9巻2号、昭和12年）や酒詰仲男、広瀬栄一氏らによる調査（『茨城県東茨城郡大串貝塚調査報告』日本考古学1—5、昭和25年）をはじめとして県内外の研究者によって調査研究がなされてきたのである。しかし、これらの調査を通じて大串貝塚に関する基本的データの発表は不十分であり、今目的には若干の貝類や動物・魚類遺存骨と土器などの人工遺物が明らかにされているにすぎない。すなわち貝層の分布状況やその構造、遺跡としてのひろがりについてはほとんど明らかにされていないといっても過言ではなかろう。わずかに



第3図 大串貝塚B, 地点トレンチ設定図

茨城県歴史館による測量調査（『茨城県史料（考古資料編）先土器・縄文時代』昭和57年）によって貝層のひろがりが見られたのであるが、これが遺跡としてどのような構造を持つものかについては明確にはされなかったのである。

大串貝塚は縄文前期の遺跡として全国的に見ても重要な位置を占めている。とりわけ花積下層式土器を出土する遺跡そのものが多い中では、本貝塚の主形成期が当該期であることは、その自然環境や文化の解明のために本貝塚に課せられた課題は少なくないといえるのである。大串貝塚は現在、C地点のみが国の指定史跡となっているが、その他の部分については無指定であり、その保存対策の必要が指摘されていた。また指定部分についても単に地表面から貝殻の散布が確認されている部分のみであって、地表面下の状況については何一つとして検討されているわけではないのである。そういう意味では学術的な調査に基づいて貝塚の範囲と構造を明確にし当面史跡の拡大は保存対策上の緊急の課題になろうとしているといえるのである。それと同時に、今後の調査を想定した縦軸と横軸を明らかにしておくことが発掘という遺跡の破壊を伴う作業の調査者の責任であろう。

大串貝塚は基本的にA、B、Cあるいは甲、乙、丙のように3地点に分けて捉えられてきた。貝層形成の時間的経緯と貝層間の不連続性から調査団は3地点に分けることにするが、今回の調査はB地点の分布状況を明確にすることにした。しかし、大串貝塚は単に貝殻が散布する範囲をもって遺跡として認識すべきものではなく、遺跡としての領域は貝層を残した人々の住居あるいは生産活動の場との有機的な関連において把握されるものであり、こうした課題と調査期間の整合関係の上で調査規模が決定された。

一口に分布調査と言っても簡単にはいかない。分布調査にしても貝層確認の調査にしても、それは垂直分布と平面分布の二つの側面から捉えられるものであり、これらは今後の調査の尺度としての精度を要求されているといえるであろう。こうした点を考慮して大串貝塚の貝層各地点について検討してみるとB<sub>1</sub>地点は土地所有者市毛氏宅の建築のさいに台地裾部が削平されたさいに、貝層の露出をみこれがかなりの厚さを有しているものの、貝層のひろがりについては明確ではなく、散乱した貝殻は住宅の周辺および畑地にひろがっていた。この地点については貝層のひろがりをも平面的に追いつきながら、その垂直分布を明らかにする必要性を痛感した。B<sub>2</sub>地点については当面破壊の危機はない。かつて酒詰仲男氏による調査がおこなわれているので、貝層がどの付近にまで伸びているかをトレンチ及びボーリング調査によって確認することにした。垂直分布については今後実施する必要がある。A地点については常澄中学校の建築によって大部分が失われている。また国指定になっているC地点については、地表面の観察によって貝層の範囲が決定されているが、遺物の包含層はさらに下位面に及んでいることは確実であり、調査が必要であるが日程の都合により、今回は実施することは避けた。遺跡の範囲を正確に決定するためにはA、C地点については後日調査が必要であると思われる。

#### 4. 調査の方法

前述の調査目的に照して調査地点をB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>地点すなわち大串貝塚の南側部分についての範囲の確認に重点を置いた。B<sub>1</sub>地点については主トレンチとサブトレンチを設定した。サブトレンチはB<sub>1</sub>地点貝層の東端の確認を目的としたが、貝層は確認されず、土器片のみが包含されていた。主トレンチは幅1.5m、長さ29.5mとし、台地上から低湿地にかけて分層発掘を試みた。台地部分については土砂採掘と投棄によって攪乱が顕著であったが、貝層は斜面部から堆積を始めるためにほとんど損壊を受けていない。住宅建築の際にカットされたために貝層が露出した部分から把握できる堆積層を基準

にして分層発掘を実施することにした。カット断面から50cmを自然遺物の構成を析出する鍵層として残し、その他の部分を層位毎に人工遺物および特殊な自然遺物（主として骨類）をとり出し、残りの貝および自然遺物はすべて現地で水洗し、細かな動物および魚類遺存骨を取り出した。また沖積低地の部分についても、どの位の所まで遺物が包含されているかを確認するために可能な限り掘り下げる作業を進めていくことにした。

カット断面に残した50cmのベルト部分については50×50cmの範囲で層別にすべての堆積層を持ち帰り、これを水洗調査して詳細な動物遺存体の種別の同定とその構成を把握することにした。これらの所見については詳細に記すが、大串貝塚は貝塚の形成前にも人々の生業活動の拠点があり、さらに遺物は貝層が切れる沖積低地においてもかなり深く遺物が包含されていることが判明したのである。この中には堅果類なども包含されており、今後の調査の上での重要な留意点の一つとなりうることが判明したのである。

## 5. B<sub>2</sub>地点の調査

B<sub>2</sub>地点は酒詰仲男氏が発掘調査を実施している。酒詰氏の設定した位置は明確ではないが貝塚を損なわない形で貝層の堆積状況を確認するために酒詰氏のトレンチの再調査が最も合理的であると考えられた。一応、聞き込みによって、その位置を想定しトレンチを設定したのであるが、その位置を確定することは出来なかった。

設定したトレンチは7m×1.5mであり、道路に沿った斜面部の貝層露出地点に調査区を設けた。今回の設定目的はかつて調査された部分ならば平面分布と垂直分布の双方を把握できると考えられたが、既調査区をはずれた場合は貝層には手をつけずに主に貝層のひろがりをおさえることに重点を置いた。しかし貝層の切れる台地下の沖積地面については遺物の包含状況について確認しておこうと考えた。

調査の結果、貝層の上面はほぼ全面的に60～100cmにわたって攪乱が入っている。攪乱層中には若干と貝殻と現代の瓦片、陶器片などが混入しており、比較的新しい時期の攪乱であることが判明した。最も深い攪乱溝は純貝層に近い貝層の上面に達しており、表面にみられる貝殻は深掘りによってこの部分の貝殻が露出したものと判断された。

比較的プライマリィな地点からB<sub>2</sub>地区調査区について言及してみると次のような層順になるものと思われる。

### 第1層 攪乱層

第2層 黒褐色土層。貝殻はほとんど混入せず、土器片、小石を若干混じえる土層である。土質は粘性がつよく若干のローム粒がまじる。本層は貝層の上面を覆っているものと判断される。

第3層 貝層。純貝層に近い混土貝層、貝層は全く調査していないが花積下層式土器片が検出されている。

第4層 黄褐色土層。ローム粒のかなり含まれる土層である。貝殻は全く含まれないが土器片は若干含まれている。

第5層 ローム層。

本地点（B<sub>2</sub>地点）では沖積土まで調査の手をのばさなかった。貝層は第4層上についているものと推定される。貝層は地点を異にして数地点存在する模様であるが台地斜面は雑木林の繁茂によって地表面から貝殻の散布状況については把握することが出来ない。しかし、貝層の遺存状態はきわめて良好であると判断された。B<sub>2</sub>地点については貝層に手をつけず、単なる貝層の分布をとらえた。従って貝塚の基本的な構造については詳細に把握していないので略述した。将来、必要があれば別の形で述べたいと思っている。

## Ⅱ．大串貝塚B<sub>1</sub>地点の調査

### 1．調査の概要

大串貝塚B<sub>1</sub>地点のトレンチは、貝層の平面分布のうち南北方向の範囲、特に南側限界の把握と、貝層の垂直分布の調査を主目的として設定されたものである。トレンチは、東西の幅1.5m、南北の長さ29.5mで設定され、南端を起点として1m毎の区に分けて表記することにした。現在の地表は、トレンチの18～23区で約30度の傾斜になっており、調査以前に斜面の一部が削られて、20～21区西側で貝層の断面が露出した状態にあった。そこで、20～21区を中心として南北それぞれの方向に貝層の上面を追跡しながら調査を進め、最終的には貝層の範囲を含む15～25区について調査を実施した。貝層は、18～23区の間分布し、標高4.7mから6.8mにかかる約20度の傾斜面に堆積している。最も厚い部分で約1.4mを測る貝層の堆積は全て、縄文時代前期の花積下層式期に形成されたものである。

貝層は、斜面の削平以外にも、18～19区を東西に横断する溝状の掘り込みによって攪乱を受けている。このため、貝層の南側末端部を確認することができず、15～18区に堆積する第8～12層との層序関係も明らかにし得なかった。但し、第11層からは浮島式土器が出土しており、第8～11層は、花積下層式期の貝層よりも新しい時期に堆積したと考えられる。実際には第12層と貝層との前後関係のみが不明である。第12層は遺物包含層であり、これによって貝層の南側限界を越えて遺跡の範囲が拡大することが明らかにされた。しかし、標高3.5m付近から地下水が湧出してトレンチの下底が水没するために、0～15区へ調査区を拡張して第12層を追跡することは不可能であった。また、貝層下にも遺物包含層の存在することが明らかにされたが、基盤層を確認するには至らず、第32層を遺物包含層の最下層として捉えるに止まった。

調査においては、主に平面的な観察から仮層位番号を付して分層発掘を行なった。最終的な層位番号は、30層に分層される貝層と、36層に分層される土層・砂層・砂礫層を、トレンチの東壁セクションを基本として整理したものである。

### 2．貝層の堆積

貝層は、最終的には30層に分層された。貝層の層位番号は、土層・砂層・砂礫層から独立で付し、番号の頭に「S」を冠して表記することにした。全てヤマトシジミを主体とする貝層であり、貝層中の貝の状態については、ヤマトシジミを中心として観察を行なった。以下に各貝層の観察所見を報告する。

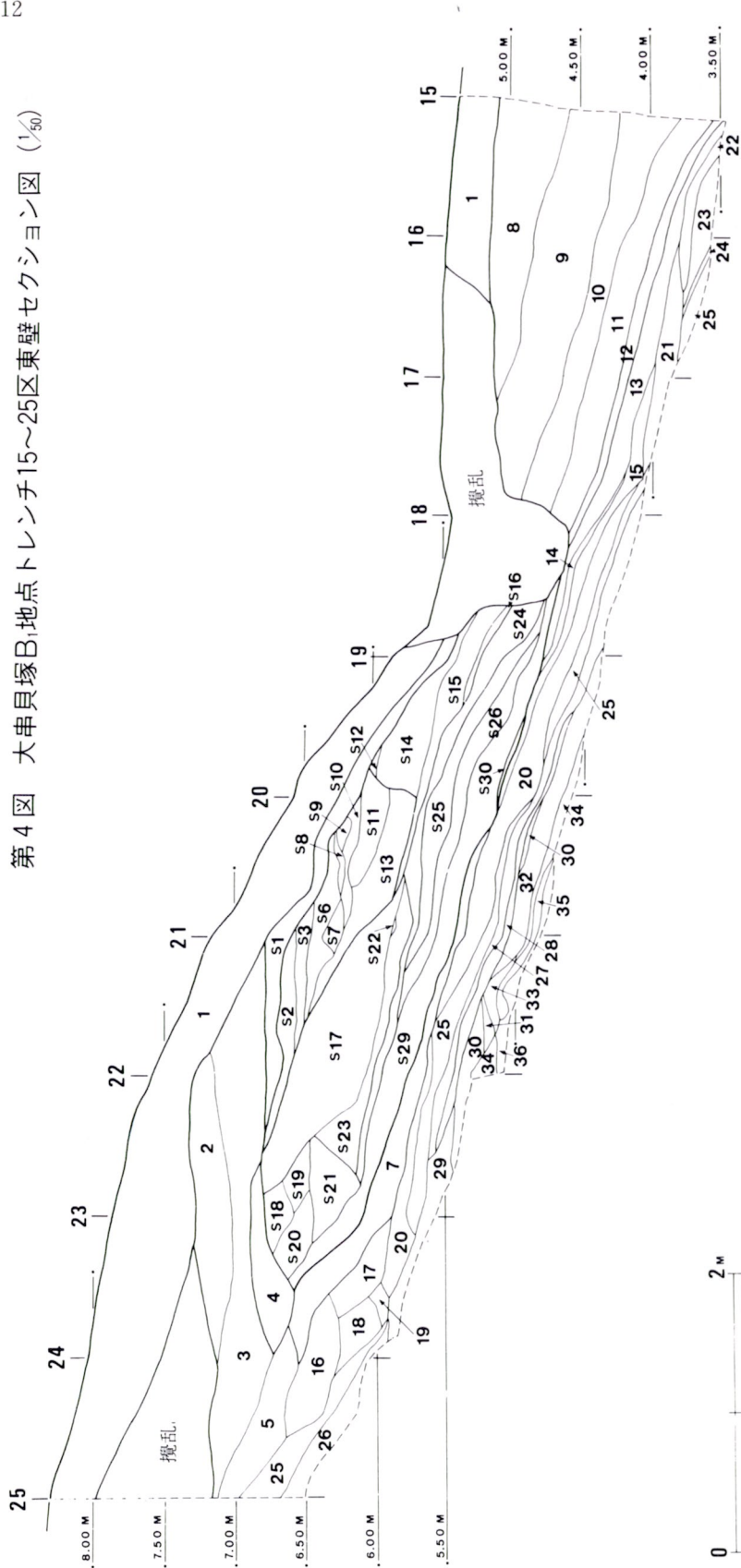
**S1層** 暗褐色土中に少量の貝が混じる混貝土層である。貝塚形成後の自然堆積層であり、貝層の崩落および草木の根による攪乱で貝が混入したと考えられる。層中には後世の遺物も含まれている。

**S2～S13層** トレンチの東壁セクションにおいては、純貝層に近いS14層に対して混土率の比較的高いS11・S13層が斜面とは逆の傾斜で堆積しているのが明瞭に観察された。S2～S13層は、S14層堆積後に斜面がS13層下面に相当する深さまで掘り込まれ、その掘り込みの中に堆積したものと考えられる（但し、S12層は掘り込み以前に堆積した可能性もある）。このうちS3・S6・S11層については、トレンチの東壁から西壁へ連続して堆積していることが確認されており、掘り込みの規模は小さなものではない。各層の堆積には締まりがあり、掘り込まれた時期が明らかでないことから、これを一括の攪乱として扱わずに分層して報告する。S2層は、暗褐色土中に少量の貝が混じる混貝土層であり、破碎貝片と小礫を若干含む。S3層は、茶褐色土の混土貝層であり、破碎貝片<sup>註1</sup>を多量に含む。S4層は、黒褐色土中に少量の貝が混じる混貝土層である。S5層は、暗褐色土の混土貝層であり、破碎貝片を含む。S6層は、黒褐色土中に少量の貝が混じる混貝土層であり、混貝率が極めて低い。S7層は、暗茶褐色土の混土貝層であり、破碎貝片を含む。S8層は、暗褐色土の混土貝層であり、破碎貝片を多量に含む。同じ内容の貝層がトレンチの東壁と西壁の両セクションで観察されているが、これは、連続する堆積ではない。S9層は、黒褐色土の混土貝層であり、小礫を含む。S10層は、黒褐色土中に少量の貝が混じる混貝土層である。S11層は、黒褐色土の混土貝層であり、焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片を多量に含む。S12層は、暗褐色土の混土貝層であり、焼けた痕跡を有する破碎貝片が主体をなす。S13層は、黒褐色土の混土貝層であり、S11層よりも混土率が低い。焼けた痕跡<sup>註3</sup>を有する貝と破碎貝片を多量に含む。以上のS2～S13層のうちS3層とS7層は、土質がS17層に近似しており、S17層の崩落土層の可能性がある。なお、S2～S13層を一括する場合は、第I層群という呼称を使用する。

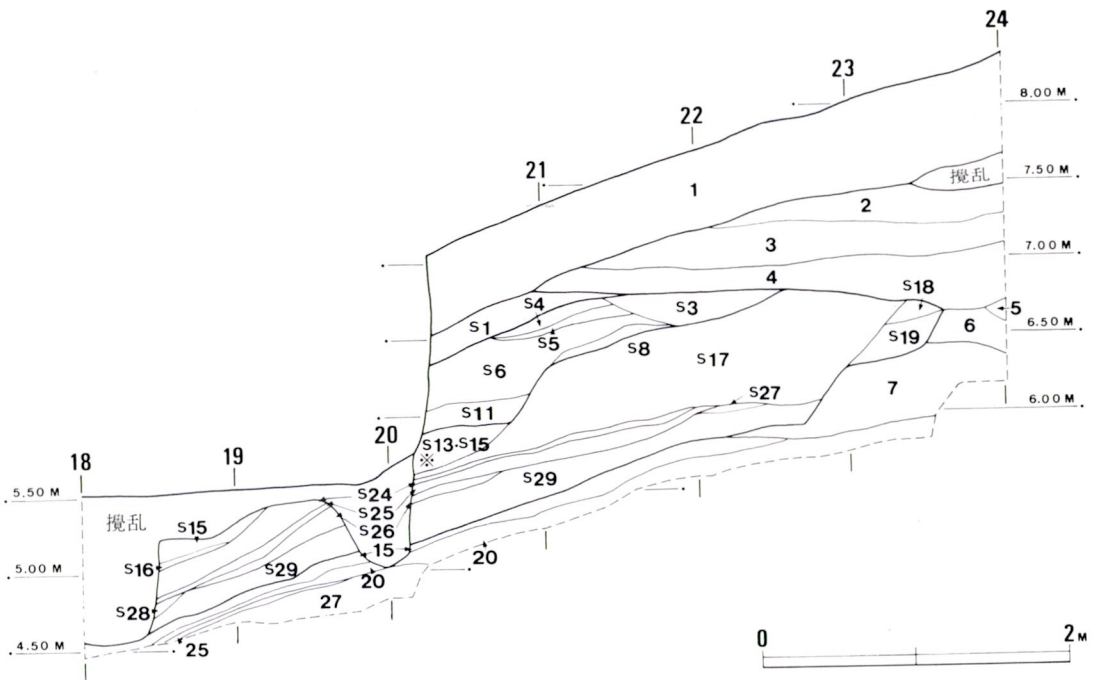
**S14～S16層** 貝層範囲南半部の18～21区に堆積しており、S14・S15層の南北両側末端部とS16層の南側末端部は、掘り込みによって破壊されている。S14層は、暗褐色土の混土貝層であるが、全貝層中で混土率が最も低く純貝層に近い。この層は、密に堆積した貝の隙間に土が充満しておらず、貝層の断面を維持するのが困難であった。貝層中には焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片を含む。S15層は、暗褐色土の混土貝層であり、S14層よりも混土率が高い。暗褐色土には貝の微細片が混じり、層全体が白味を帯びて見える。貝層中には炭化物・炭化粒および焼けた痕跡を有する貝、破



第4図 大串貝塚B<sub>1</sub>地点トレンチ15~25区東壁セクション図 (1/50)



- |     |           |      |        |      |            |      |           |      |           |  |           |
|-----|-----------|------|--------|------|------------|------|-----------|------|-----------|--|-----------|
| 第1層 | 表土層       | 第8層  | 黒褐色土層  | 第15層 | 暗褐色土・砂・大礫層 | 第22層 | 橙土・砂層     | 第29層 | 灰褐色砂・大礫層  | 第36層   | 暗黄褐色砂・中礫層 |
| 第2層 | 暗褐色土・中礫層  | 第9層  | 茶褐色土層  | 第16層 | 茶褐色土・砂・大礫層 | 第23層 | 茶褐色土層     | 第30層 | 灰褐色砂・大礫層  | (礫については、指頭大以下のものを小礫、拳大以上のものを大礫として、その中間のものを中礫とした。大礫の層には中礫と小礫が、中礫の層には小礫が、それぞれ一緒に含まれている。) |           |
| 第3層 | 茶褐色土・中礫層  | 第10層 | 暗褐色土層  | 第17層 | 暗褐色土層      | 第24層 | 黒褐色土・小礫層  | 第31層 | 暗灰褐色砂・中礫層 |  |           |
| 第4層 | 黒褐色土層     | 第11層 | 暗茶褐色土層 | 第18層 | 黄褐色砂・小礫層   | 第25層 | 黄褐色砂層     | 第32層 | 黄褐色砂・大礫層  |  |           |
| 第5層 | 暗黄褐色砂・大礫層 | 第12層 | 黒色泥炭層  | 第19層 | 暗黄褐色砂・小礫層  | 第26層 | 灰褐色砂層     | 第33層 | 暗黄褐色砂・中礫層 |  |           |
| 第6層 | 褐色土・大礫層   | 第13層 | 茶褐色土層  | 第20層 | 黄褐色砂・小礫層   | 第27層 | 暗黄褐色砂・大礫層 | 第34層 | 黄褐色砂・大礫層  |  |           |
| 第7層 | 黒褐色土層     | 第14層 | 暗褐色土層  | 第21層 | 茶褐色土・砂・小礫層 | 第28層 | 暗灰褐色砂・中礫層 | 第35層 | 暗灰褐色砂・中礫層 |  |           |



第5図 大串貝塚B<sub>1</sub>地点トレンチ18～24区西壁セクション図(1/50)(※は註3を参照)

碎貝片を多量に含む。S16層は、褐色土の混土貝層であり、焼けた痕跡を有する破碎貝片が主体をなす。なお、S14～S16層を一括する場合は、第Ⅱ層群という呼称を使用する。

**S17層** 貝層範囲北半部の21～23区を中心に堆積しており、全貝層中で最も厚い。南側の一部は掘り込みによって破壊されている。21～23区の調査当初、S17層は、20～21区の貝層断面で既に確認されていたS25層へ連続するものと予想していた。両層は、特徴的な茶褐色土の混土貝層であり、貝の状態も似ている。しかし、S17層とS25層の間には、これも特徴的な黄褐色砂を含むS24層が堆積しており、両層がそれぞれ独立した貝層であることが明らかにされた。両層をセクションで比較してみると、S25層は茶褐色土が貝の隙間に均等に含まれるのに対して、S17層は、貝と土とがモザイク状に堆積しており、混土率が高い。焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片はほとんど含まれない。

**S18・S19層** 貝層範囲北部の22～24区に堆積している。S18・S19層は、単一の層として調査した後にセクションの観察から2つの層に細分された。S18層は、黒褐色土の混土貝層であり、中礫を若干含む。S19層は、暗褐色土の混土貝層であり、礫は含まない。

**S20・S21層** 22～24区の東側にのみ堆積している。トレンチの東壁セクションにおいて、暗茶褐色土の混土貝層であるS23層に対して黒褐色土の混土貝層であるS

21層が斜面とは逆の傾斜で堆積しているのが明瞭に観察された。S20・S21層は、S23層堆積後に斜面がS21層下面に相当する深さまで掘り込まれ、その掘り込みの中に堆積したものと考えられる。即ち、貝層中にPitが掘られていたことになるが、調査時にはその平面を確認することができなかった。S20・S21層は、単一の層として調査した後にセクションの観察から2つの層に細分された。S20層は、黒褐色土中に貝が混じる混貝土層であり、礫は含まない。S21層は、暗褐色土中に貝が混じる混貝土層であり、小礫を含む。両層からは、イノシシ・シカなどの獣骨の大きな破片が比較的多く検出された。

**S22・S23層** S22層は、S23層上面に位置する、焼けた痕跡を有する破碎貝片のブロック状の堆積である。土の色調は、茶褐色か暗茶褐色かは明らかでない。S23層は、21～23区の東側を中心に堆積しており、トレンチの西壁セクションにはみとめられない。北側末端部は掘り込みによって破壊されていると考えられる。暗茶褐色土の混土貝層であり、焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片を多量に含む。

**S24層** 18～23区という広範囲に堆積しており、南側末端部が掘り込みによって破壊されている。茶褐色土と黄褐色砂が混じる特徴的な混土貝層である。S26層にも黄褐色砂が混じるが、S24層の砂の方が粒が細かく、その差違は感触によって明瞭に区別できる。貝層中には焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片を多量に含み、貝の微細片で層全体が白味を帯びて見える。

**S25層** 18～22区に堆積しており、南側末端部が掘り込みによって破壊されている。茶褐色土の混土貝層であるが、混土率が低く純貝層に近い。ヤマトシジミの貝殻（殻長・殻高）が全体的に大きく、焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片はほとんど含まれない。クロダイ・スズキなどの魚骨と鱗が比較的多く検出されている。

**S26層** 19～21区を中心に堆積している、茶褐色土と黄褐色砂が混じる混土貝層である。焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片を多量に含み、貝の微細片で層全体が白味を帯びて見える。炭化物も 較的多量に含まれている。なお、S17～S26層を一括する場合は、第Ⅲ層群という呼称を使用する。

**S27～S29層** S27層は、S29層上面に位置する、焼けた痕跡を有する破碎貝片のブロック状の堆積である。黒褐色土の混土貝層であり、炭化物も多量に含まれている。S28層は、南側末端部を掘り込みによって破碎されているが、18-19区の西側のみ堆積しており、これもブロック状の堆積と考えられる。黒褐色土に黄褐色砂と貝の微細片を含み、全体として暗褐色を呈した土の混土貝層である。S29層は、18～23区という広範囲に堆積しており、南側末端部が掘り込みによって破壊されている。

黒褐色土の混土貝層であり、貝層中からマガキがブロック状にまとまって検出された（第6図）。貝層全体としてもマガキが多い。焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片、炭化物を多量に含む。特にS29層下位は貝の微細片が多い傾向にあり、これを指標にS29層の上位をS29a層、下位をS29b層として遺物を採り上げたが、セクションにおいては両層を明確に区別することができなかった。S29層からはイノシシ・シカなどの獣骨の大きな破片が多量に検出されており、これらのほとんどがS29層上面に集中する。なお、S27～S29層を一括する場合は、第Ⅳ層群という呼称を使用する。

**S30層** 19-20区に薄く堆積している、黄褐色砂中に少量の破碎貝片が混じる混貝砂層であり、直上にあるS29層の破碎貝片が砂層中に混入したと考えられる。

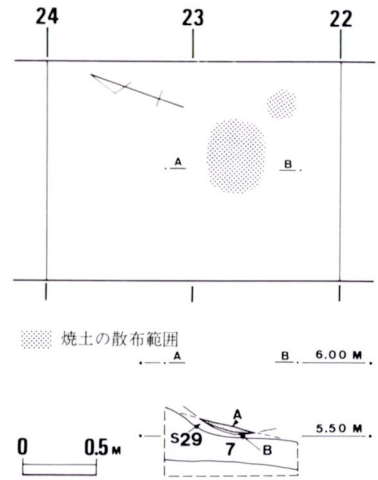
以上の貝層の堆積は、貝層に混じる土の色調から、黒褐色土を中心とした貝層群と茶褐色土を中心とした貝層群とに大別される。これは、第Ⅳ層群（黒褐色土）→第Ⅲ層群（茶褐色土）→第Ⅱ層群（黒褐色土）→第Ⅰ層群（黒褐色土）という順位で堆積しており、第Ⅲ層群がS22～S26層（茶褐色土）→S18～S21層（黒褐色土）→S17層（茶褐色土）という順位で堆積していることを考慮すれば、互層をなすと見ることもできる。また、貝層の堆積は、貝の微細片の多寡からも区別される。貝の微細片が多量に含まれる貝層は、層全体が白味を帯びる。堆積の規模が比較的大きな貝層について見るならば、S29b層（多）→S29a層（寡）→S26層（多）→S25層（寡）→S24層（多）→S23層（寡）→S17層（寡）→S15層（多）→S14層（寡）という順位で堆積しており、明らかに互層をなしている。この貝層の出現には、土の色調から大別された貝層群との関係はみとめられず、焼けた痕跡を有する貝と破碎貝片を多量に含むことが共通点として指摘される。

### 3. 貝層下の遺物包含層

貝層より上位に堆積した各層からは、少量ながら動物遺存体を含む遺物が検出されている。貝層より下位に堆積した層については、トレンチの東側半分についてのみサブトレンチを設定して、第36層までの調査を実施した。貝層との層序関係が不明な第12層を加えて、第7・12～15・20・22～24・28・32層から遺物が検出されている。その他の層からは遺物が検出されておらず、特に砂層については無遺物層と考えることができよう。第32層以外の遺物包含層からは花積下層式土器の破片が出土しており、これらは該期に堆積したと考えられる。第32層からは、縄文時代早期の三戸式土器と貝殻条痕文系土器の破片がそれぞれ1点ずつ検出されているが、これから第32層の堆積時期を決定することは困難である。



第6図 S29層中で検出されたマガキ



第7図 S29層上面炉址実測図(1/50)

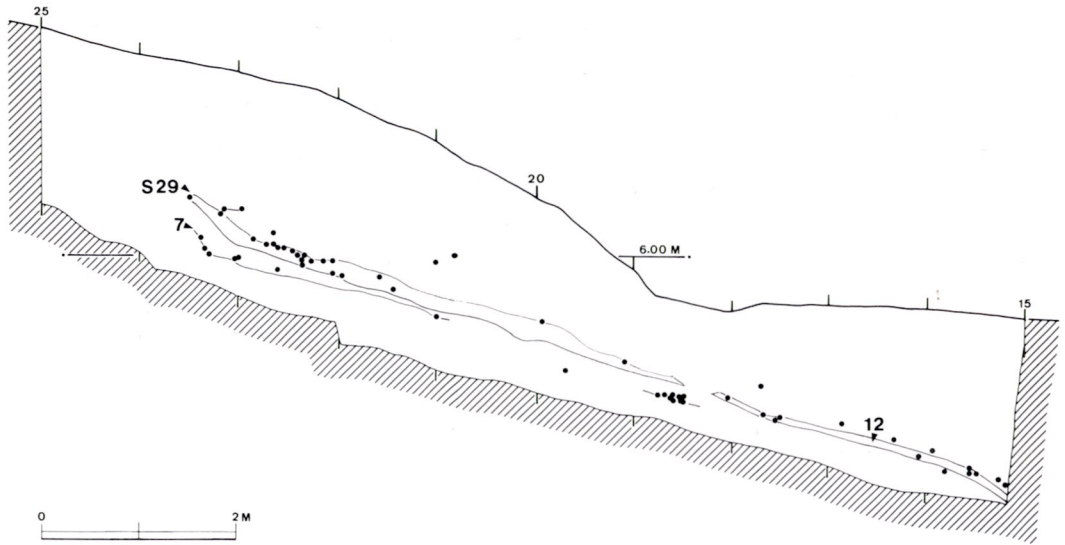
第12層は、炭化した植物遺存体を極めて多量に含む黒色泥炭層であり、北側末端部が掘り込みによって破壊されているため、貝層との層序関係を捉えることができなかった。植物遺存体のなかには堅果果実の殻の破片もみとめられる。ここには獣骨の破片も多く、多量に検出された小さな破片のほとんどに焼けた痕跡がみとめられるのに対して、大きな破片にはそれがみとめられないことが特記される。貝層を含めた他の層と比較して、土器・石器・骨角器が多く出土しており、特に石器製作に関わる剥片が多量に検出された。

貝層下の遺物包含層では、第7・13・14層からシカ・イノシシなどの獣骨の大きな破片が数点ずつ検出されており、そのうち第13層のものは直上の第12層に近い位置にあった。第20層からも1点のみではあるが、獣骨の大きな破片が検出されている。第22～24層中には炭化粒と焼土粒が含まれており、特に第24層は、多量の炭化粒が含まれることにより黒褐色を呈する。第28層にはヤマトシジミの貝殻が5点含まれていた。貝殻は白色を呈した脆弱な状態になっている。この層からも少量ながら獣骨の小さな破片が検出されている。なお、15～19区に堆積する第12層以下の遺物包含層を一括する場合は、第V層群という呼称を使用する。

基盤となる層が確認できておらず、第36層より下位については、遺物包含層の有無を明らかにし得ない。

#### 4. S29層上面の炉址と獣骨の分布

トレンチ22-23区のS29層上面においては焼土の散布がみとめられ、特に同区中央部に焼土の集中する地点が存在する。ここを中心として周囲には、焼けた痕跡を有する獣骨片と貝殻も比較的多く散布していた。そこで、焼土の集中する地点の中心を南



第8図 大形破片にみる獣骨の垂直分布状況

北方向に半截して断面を観察したところ（第7図）、A層とした焼土層下に、B層とした焼けて灰白色を呈する貝層が薄く帯状に堆積していた。A・Bの両層は、この地点で火熱を受けて生成されたと考えられるものである。両層は、焼けた痕跡を有する破砕貝片も多量に含んでおり、元来は混土貝層の堆積である。B層の直下にはS29層があり、A層の上面がS29層上面の傾斜に合致することから、両層は、貝層堆積としてはS29層の一部と考えられよう。その機能については明らかでないが、これをS29層上面に形成された炉址として捉えておく。S27層も炉址の周縁部に位置しており、基本的にはS29層の一部と考えられる。

獣骨のうち比較的大きな破片については、調査時に可能な限り出土位置を記録するように努めた。貝層の水洗選別によって摘出されたものを含めた、獣骨の量的な分析は未了であるが、少なくともイノシシ・シカの骨片のうち大きな破片で検出された顎骨については、ほぼ捉えられている。これを見ると（第8図）、獣骨の分布は、貝層範囲外の15～18区では第12層を中心としており、貝層下の遺物包含層では18～19区の第13～15層、20～24区の第7層に比較的多く、貝層中ではS29層に集中している。なお、記録されなかったものでは、調査および水洗選別の所見から、S20・S21層中にも大きな破片が比較的多く含まれていた。S29層では、特に貝層の上面において検出されたものが多く、炉址付近に相当する22～23区で記録された獣骨片のほとんどに焼けた痕跡がみつめられる。これは、既にその地点には獣骨片があり、炉址が機能することによって火熱を受けるに至ったと考えられよう。

第1表 貝殻重量に基づく貝種組成比率

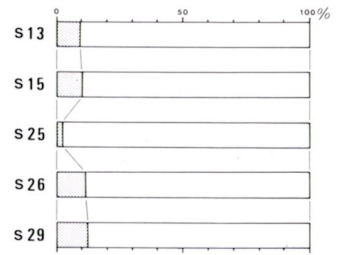
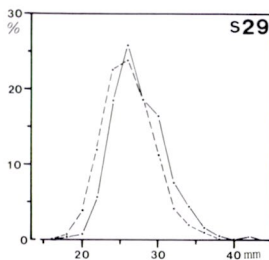
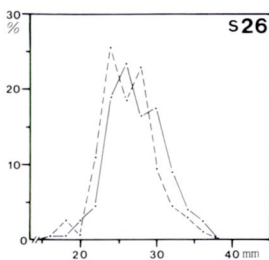
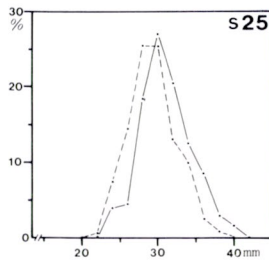
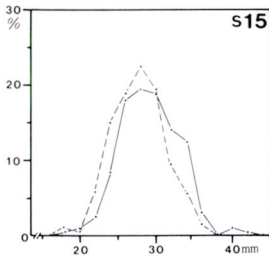
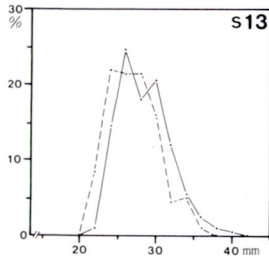
層位	S 13	S 15	S 25	S 26	S 29
貝殻総重量 (g)	15,376.6	26,005.4	16,647.6	16,215.0	12,277.8
ヤマトシジミ	94.2 %	95.6 %	94.2 %	91.3 %	87.1 %
マガキ	4.6	3.6	5.2	7.6	11.5
ハマグリ	0.9	0.6	0.5	0.6	1.1
その他	0.3	0.2	0.1	0.5	0.3
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

## 5. 貝層の分析

トレンチ20-21区の西側においては、50cm四方の平面で柱状にサンプル地点を設定し、層位毎に貝層のサンプリングを行なった。そのうちS13・S15・S25・S26・S29層の各サンプルに対して、貝種組成比率、ヤマトシジミの殻長・殻高分布、焼けた痕跡を有する貝の比率に関する分析を実施した。それぞれの分析結果について報告する。

**貝種組成比率** 各貝層中の貝類全体に占める各貝種の比率は、5mm方眼のメッシュ以上のものを対象として、破片を含めた全ての貝殻について選別を行ない、重量に基づいて算出した（第1表）。各層ともヤマトシジミとマガキの2貝種で99%前後を占めており、次いでハマグリが多い。ヤマトシジミは、S13・S15・S25層という上位の3層が95%前後であるのに対して、これより下位のS26層が91.3%、S29層が87.1%と低い。これは下位の2層にマガキが多く含まれていることによる。特に調査時にブロック状の堆積がみとめられたS29層ではマガキが11.5%を占めるために、相対的にヤマトシジミの比率が著しく低下することになる。ハマグリは、S13・S29層の1%前後が他の3層に対して2倍の比率を示している。その他の貝種では、イガイがS13・S15・S26層で、オオノガイがS26・S29層で、コタマガイがS26層で、クボガイがS29層で、それぞれ0.1%近くを占めており、これ以外の貝種はいずれも0.05%に満たないものである。

◀ 第9図  
 ヤマトシジミの殻長・殻高分布  
 (実線が殻長・破線が殻高)



▶ 第10図  
 ヤマトシジミにみる焼けた  
 痕跡を有する貝の比率  
 (トーン部分が焼けた痕跡を有する貝)

ヤマトシジミの殻長・殻高分布 ヤマトシジミの殻長と殻高は、貝殻が完形のものの中から無作為に200個を採り出して計測し、2mmを単位として計測値をまとめて個数の分布を比率で表現した(第9図)。殻長で見ると、各層とも26~30mmの範囲内にピークがみつめられる。S26・S29層が26mmにピークを有するのに対して、この上位に堆積するS25層は、調査時にも観察された通り、殻長・殻高が全体的に4mmほど大きく、30mmにピークを有している。この3層の堆積はほぼ連続しており、S26層とS25層の間には、ヤマトシジミの採取に関わる条件の変化を想定することができる。S25層とS15層の間には未分析の貝層が介在するため変化の開始については明らかにし得ないが、S25層より上位のS15層が28mm、S13層が26mmにピークを有しており、再び全体的に小さくなる。ここにもヤマトシジミの採取に関わる条件の変化が想定されよう。

焼けた痕跡を有する貝の比率 各貝層中には焼けた痕跡を有する貝が含まれており、貝層によってその量に多寡がある。焼けた痕跡は各貝種にみつめられるが、貝層の主体となるヤマトシジミについてのみ、貝種全体に占めるその比率を重量に基づいて算出するという分析を試みた(第10図)。焼けた痕跡を有する貝は肉眼によって識別可能な灰白色を呈したものに限定して、これを貝種組成比率の分析の際に選別したヤマトシジミの中から採り出した。焼けた痕跡を有する貝のほとんどは破碎貝片

註4



であり、5mm方眼のメッシュ以下のものも対象とするならば、層毎にはさらに高い比率を示すと考えられる。分析の結果は、調査時に「焼けた痕跡を有する貝を多量に含む」と観察されたS13・S15・S26・S29層がいずれも10%前後の含有率を示した。これに対してS25層は、2.3%の含有率であり、焼けた痕跡を有する貝がほとんど含まれない。この差異は貝の調理方法によるものではなく、既に残滓となった貝殻のうち火熱を直接受けることにより焼けた痕跡を有するに至ったものがあったと考えられる。それが廃棄以前あるいは廃棄以後であるのかは明らかでないが、廃棄以後には、S29層上面の炉址にみるように貝層の上面が火熱の使用を含む機能空間として利用されることにより、焼けた痕跡を有する貝および破碎貝片が多量に生成されたことが考えられよう。

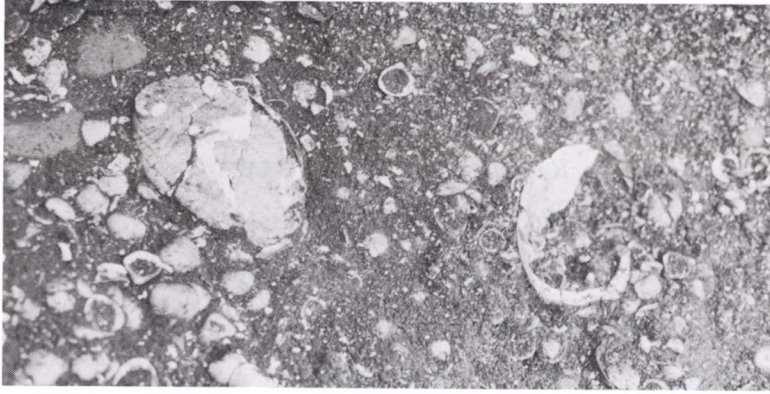
## 6. 貝の種類と検出状況

大串貝塚B<sub>1</sub>地点トレンチの調査において貝層から検出された、軟体動物の貝類について報告する。対象としたのは5mm方眼のメッシュ以上に残るものであり、次の20科<sup>註5</sup>28種が同定可能であった。<sup>註6</sup>

### 腹足綱

ミミガイ科	Haliotidae
クロアワビ	<i>Nordotis gigatea</i> (GMELIN)
ユキノカサガイ科	Acmaeidae
ニシキウズガイ科	Trochidae
クボガイ	<i>Chlorostoma argyrostoma lischkei</i> (TAPPARONE-CANEFRI)
バテイラ	<i>Omphalius preifferi</i> (PHILIPPI)
イシダタミガイ	<i>Monodonta labio</i> (LINNÉ)
リュウテンサザエ科	Turbinidae
サザエ	<i>Batillus cornutus</i> (LIGHTFOOT)
アマオブネガイ科	Neritidae
カノコガイ	<i>Clithon sowerbianus</i> (RÉCLUZ)
タニシ科	Viviparidae
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (v.MARTENS)
カワニナ科	Pleuroceridae
カワニナ	<i>Semisulcospira bensoni</i> (PHILIPPI)

ウミニナ科	Potamididae
ヘナタリ	<i>Cerithideopsilla cingulata</i> (GMELIN)
アクキガイ科	Muricidae
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> CROSSE
レイシガイ	<i>Thais bronni</i> (DUNKER)
イボニシ	<i>Thais clavigera</i> (KÜSTER)
オリエレヨフバイ科	Nassariidae
アラムシロガイ	<i>Hinia festiva</i> (POWYS)
オナジマイマイ科	Bradybaenidae
ヒダリマキマイマイ	<i>Euhadra quaesita</i> (DESHAYES)
斧足綱	
フネガイ科	Arcidae
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (LINNÉ)
タマキガイ科	Glycymeridae
ベンケイガイ	<i>Glycymeris albolineata</i> (DUNKER)
イガイ科	Mytilidae
ムラサキインコガイ	<i>Septifer (Mytilisepta) virgatus</i> (WIEGMANN)
イガイ	<i>Mytilus coruscus</i> GOULD
イタボガキ科	Ostreidae
イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i> LISCHKE
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)
シジミガイ科	Corbiculidae
ヤマトシジミガイ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME
フナガタガイ科	Trapeziidae
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium (Neotrapezium) liratium</i> (REEVE)
マルスダレガイ科	Veneridae
アサリ	<i>Tapes (Amygdala) philippinarum</i> (ADAMS et REEVE)
コタマガイ	<i>Gomphina (Macridiscus) veneriformis</i> (LAMARCK)
カガミガイ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i> (REEVE)
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (RÖDING)
ニッコウガイ科	Tellinidae
ヒメシラトリガイ	<i>Macoma incongrua</i> v.MARTENS



第11図 S25層下部もしくはS26層上面で検出されたクロアワビ

オオノガイ科 Myidae

オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai* (MAKIYAMA)

この他に同定不能な陸産の微小巻貝が数種あり、5mmメッシュ以下に含まれる完形の貝殻のほとんどは、この微小巻貝である。

次に、各貝種について検出状況を中心とした説明を加える。

**クロアワビ** 各貝層中に含まれているが、そのほとんどが細片である。S25層下部もしくはS26層上面からは、完形のものと同程度残存するものが約20cmの距離で検出された(第11図)。比較的大きな破片はS25層に多く、少量ながらS13・S23・S29層にもある。

**ユキノカサガイ科** S26・S29層から1点ずつ検出された。S26層のものは殻が6mmと小さく、高いかさ形を呈する。S29層のものは殻が楕円形で、低いかさ形を呈しており、計測可能な殻の短径は12mmである。

**クボガイ** S1・S13・S14・S15・S25・S26・S29層中に含まれており、腹足綱のなかでは貝種組成比率が最も高い。S29層から比較的多量に検出されており、次いでS26層中に多く、これより上位の貝層中には少ない。

**バテイラ** S29層から破片が1点検出された。

**イシダタミガイ** S25層から完形のものが1点、S29層から破片が1点検出された。

**サザエ** ふたのみが検出されている。S1・S11・S23・S25・S29層から、それぞれ1点ずつの計5点である。

**カノコガイ** S1層から4点、S13層から2点、S14層から1点、S25層から5点、S26層から2点、S29層から1点の計15点が検出された。

**オオタニシ** S2・S11・S14層から、それぞれ1点ずつの計3点が検出された。

カワニナ S 1層から4点、S 11層から1点、S 13層から2点、S 14層から2点、S 25層から3点、S 29層から3点の計15点が検出された。

ウミノナ科・ヘナタリ ウミノナ科のうちヘナタリと同定できたものは、S 25層の3点、S 26層の5点、S 29層の1点である。この他に破片のため同定不能なものがS 1層から3点、S 15層から1点、S 25層から6点、S 29層から2点検出されており、ウミノナ科としては計21点である。

アカニシ ほぼ完形のもの、S 1・S 11・S 23層からそれぞれ1点ずつ、S 29層から2点検出されている。S 29層のうちの1点は、S 29層下部にあり、第7層上面に接していた。破片は、S 13・S 15・S 25・S 26層中にも少量ながら含まれている。

レイシガイ S 1・S 14・S 27・S 29層から、それぞれ1点ずつの計4点が検出された。

イボニシ S 23層から1点検出された。

アラムシロガイ S 26層から1点検出された。

ヒダリマキマイマイ S 15・S 25・S 29層から検出された。S 25層中には5個体以上が含まれており、他の貝層中には1個体程度と考えられる。

ハイガイ S 15層からほぼ完形の右殻が1点、S 23層から破片が1点、S 29層から完形の右殻が1点と破片が3点検出された。

ベンケイガイ S 23層から検出されたものは貝輪の破片であり、S 2・S 25層から1点ずつ検出された破片も、貝輪の製作に関わる可能性が考えられる。

ムラサキインコガイ S 26層から破片が1点検出された。

イガイ 各貝層中に含まれており、S 13・S 15層では貝種組成比率の4位を占める。そのほとんどは細片であるが、S 13・S 15・S 24・S 25・S 26層からは、殻頂を有した比較的大きな破片が検出されている。

イタボガキ S 26層から検出された貝輪の破片である。

マガキ 各貝層中に含まれており、貝種組成比率の2位を占める。特にS 26・S 29層中に多く、完形の貝殻がブロック状にまとまった状態で検出された。殻高150mm以上のものが多い。小石の付着した貝殻もみとめられる。

ヤマトシジミガイ 各貝層を主体的に構成し、貝種組成比率では圧倒的に1位を占める。貝層毎の貝種組成比率および殻長・殻高、焼けた痕跡を有する貝殻の比率については、前述した通りである。

ウネナシトマヤガイ 各貝層中に含まれており、重量に基づく貝種組成比率では目立たないが、殻頂数による個体数ではヤマトシジミガイに次いで多い。S 26層から

比較的多量に検出された。

アサリ S13・S15・S23・S25・S26・S29層から検出された。S13・S15層はともに完形の左殻が1点のみであり、他の貝層も殻頂を有した破片はそれぞれ1点あるにすぎない。

コタマガイ S11層から1点、S13層から4点、S18・S19層から1点、S20・S21層から3点、S23層から1点、S24層から1点、S25層から5点、S26層から3点、S29層から4点の計21点が検出された。

カガミガイ S26層から破片が1点検出された。

ハマグリ 各貝層中に含まれており、貝種組成比率の3位を占める。貝層全体としては殻長40～55mm・殻高35～50mmの範囲のものが多い。最小のものは、殻長39mm・殻高34mmで、S15層とS29層から検出された。殻高の最大は87mmであるが、これは殻長が不明である。殻長の最大は101mmであり、この殻高は82mmを測る。これらはS29層から検出された。貝刃に利用されているのは、殻長65～80mmの範囲のものである。

ヒメシラトリガイ 各貝層中に含まれているが、完形のものはない。S26・S29層に比較的多く、殻頂を有した残存状態の良好な破片も含まれている。

オオノガイ 各貝層中に含まれており、S25・S26・S29層では貝種組成比率の4位を占める。特にS26・S29層中に多く、殻頂を有した残存状態の良好な破片も検出されているが、完形のもの稀である。

以上の貝類の他に、節足動物のシロスジフジツボが各貝層中に含まれていた。また、B<sub>1</sub>地点トレンチ貝層サンプルの水洗選別において検出されたものには、節足動物のモクズガニ、棘皮動物のムラサキウニがある。植物遺存体では堅果果実の殻破片の炭化物が検出されており、糞石も破片の状態<sup>註7</sup>で貝層中に含まれていた。これらの詳細については未分析である。

註1 「破碎貝片」という表現は、焼けた痕跡の有無に関係なく使用したが、実際にはほとんどが焼けた痕跡を有する。

註2 礫については、指頭大以下のものを小礫、拳大以上のものを大礫として、その中間のものを中礫とした。大礫が含まれる層には中礫と小礫が、中礫が含まれる層には小礫が、それぞれ一緒に含まれている。

註3 トレンチの西壁セクションにおいてはS13層とS15層を分層していない。S15層は、調査時に東壁セクションから西壁セクションへ連続して堆積していることが確認されており、貝層もS13層とは分離してサンプリングされている。同時にS14層は、西壁セクションにまで堆積が及んでいないことが確認されている。

- 註4 灰白色に変色していなくとも火熱を受けた痕跡のみとめられる貝があることを、小池裕子氏に御教示いただいた。これを考慮すれば、実際には層毎の比率はさらに高いものとなる。
- 註5 B<sub>1</sub>地点で検出されておらず、B<sub>2</sub>地点トレンチの貝層から検出された貝種には、斧足綱バカガイ科のウバガイがある。
- 註6 貝種の同定にあたっては、小池裕子氏に御教示を賜った。  
貝種の学名については、渡部忠重・小菅貞男『標準原色図鑑全集 第3巻 貝』保育社 1967 から引用し、貝種の配列もこれに拠った。
- 註7 金子浩昌氏に御教示を賜った。

貝層サンプルの選別にあたっては、黒沢 浩・立石尚之・野口享治・三舟隆之・毛受由美・鷲尾政市の各氏と太田屋旅館に多大なる御協力を賜った。心より感謝申し上げます。

## Ⅲ．遺 物

### 1．土 器

今回の発掘調査によって検出された土器はコンテナにして6箱程である。これらの土器は、第Ⅰ層群から第Ⅳ層群までの貝層群や第Ⅴ層群の包含層群のほか、それらの下位層からも出土している。量的に一番多いのが第Ⅴ層群、次に第Ⅲ層群、第Ⅳ層群そして第Ⅰ・Ⅱ層群の順である。分類としては次のように行った。

第1土器群 三戸式土器

第2土器群 条痕文系土器

第3土器群 花積下層式土器

第1類 文様帯を有さず、素口縁を呈するもの

- 1種 斜縄文が施されるもの
- 2種 羽状縄文が施されるもの
- 3種 網目状文が施されるもの
- 4種 クシガキ文が施されるもの
- 5種 無文のもの

第2類 文様帯を有さず、複合口縁を呈するもの

- 1種 斜縄文が施されるもの
- 2種 羽状縄文が施されるもの

第3類 口縁部文様帯を有し、素口縁を呈するもの

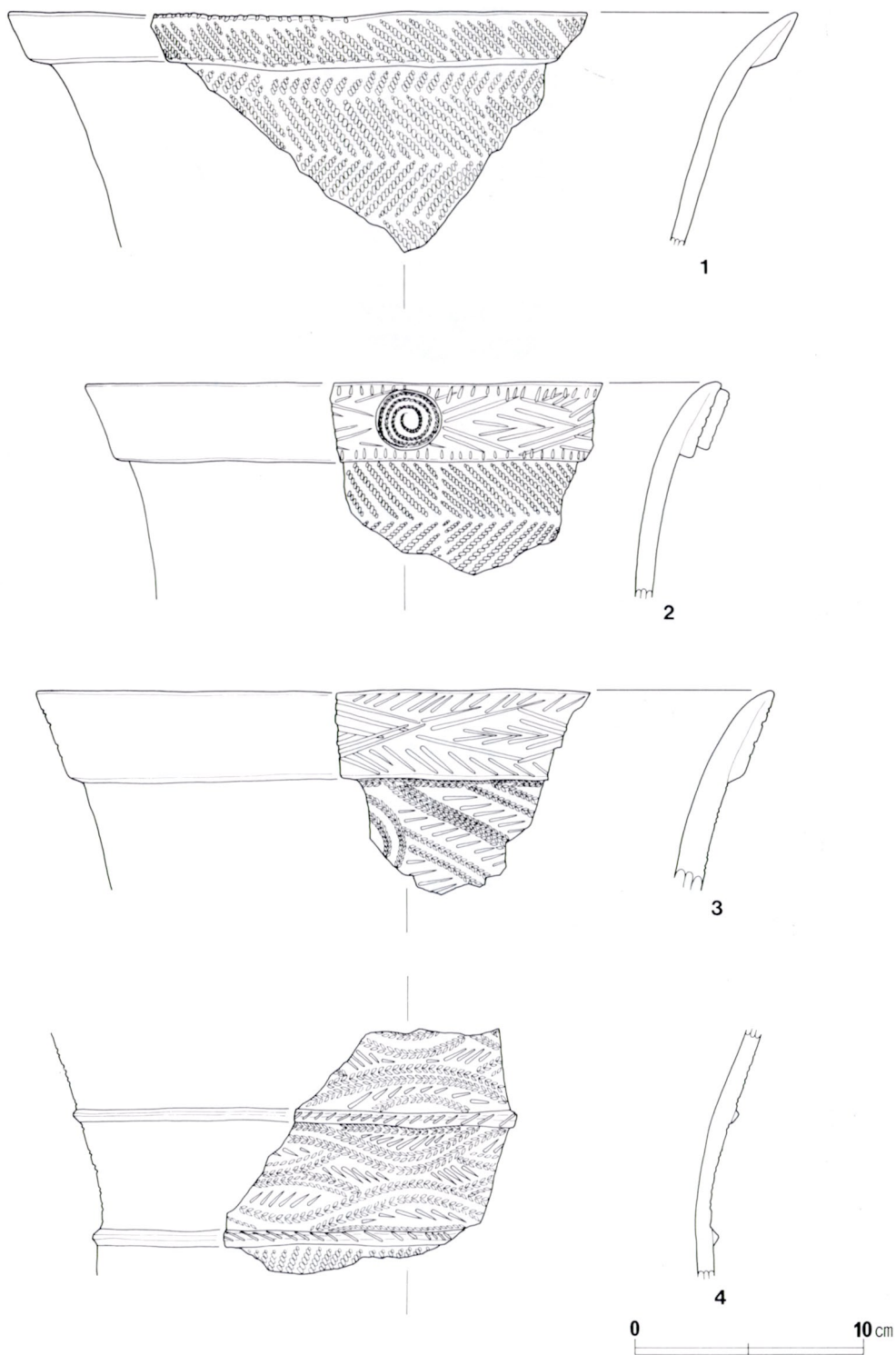
- 1種 文様帯内に沈線文が施されるもの

第4類 口縁部文様帯を有し、複合口縁を呈するもの

- 1種a 文様帯内に沈線文が施されるもの
- 1種b aと同様で、さらに貼付文が施されるもの
- 2種 文様帯内に撚糸圧痕文が施されるもの

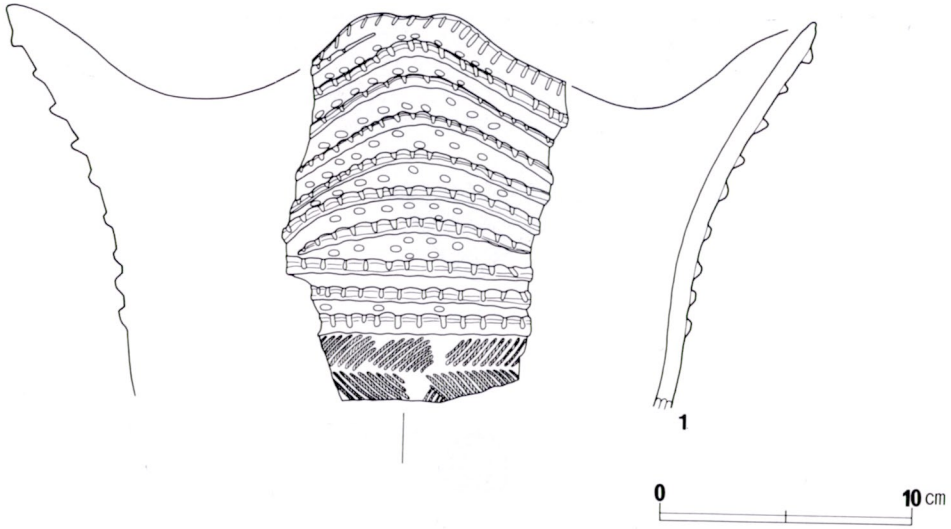
第5類 口頸部文様帯を有し、複合口縁を呈するもの

- 1種a 口縁部文様帯に沈線文が頸部文様帯に撚糸圧痕文が施されるもの
- 1種b aと同様で、さらに同形竹管文が施されるもの
- 2種a 口縁部文様帯と頸部文様帯とに撚糸圧痕文が施されるもの
- 2種b aと同様で、さらに貼付文が施されるもの



第12図 大串貝塚出土土器実測図(1)





第13図 大串貝塚出土土器実測図(2)

第6類 口頸部文様帯を有し、複合口縁で波状を呈するもの

1種 口縁部文様帯に沈線文と撚糸圧痕文が、頸部文様帯に撚糸圧痕文が施されるもの

第7類 口頸部文様帯を有し、素口縁を呈するもの

1種 文様帯内に撚糸圧痕文が施されるもの

2種 刻目のある隆帯文が施されるもの

第8類 口頸部文様帯を有し、素口縁で波状を呈するもの

1種 文様帯に撚糸圧痕文が施されるもの

2種 刻目のある隆帯文が施されるもの

第4土器群 浮島式土器

#### 1. 第32層(第14図1・2)

##### 第1土器群

1はクシ状工具により2条あるいは3条の沈線を施した後、同工具により綾杉状のモチーフが描かれたやや内湾する口縁部破片である。黒褐色を呈し焼成は良好である。

##### 第2土器群

2は波状口縁を呈し、貝殻条痕文が施されている。口唇部は平坦で原体R  $\left\{ \frac{1}{L} \right\}$ の縄文が施文されている。



图14 大串貝塚第32層・第20層出土土器拓影图

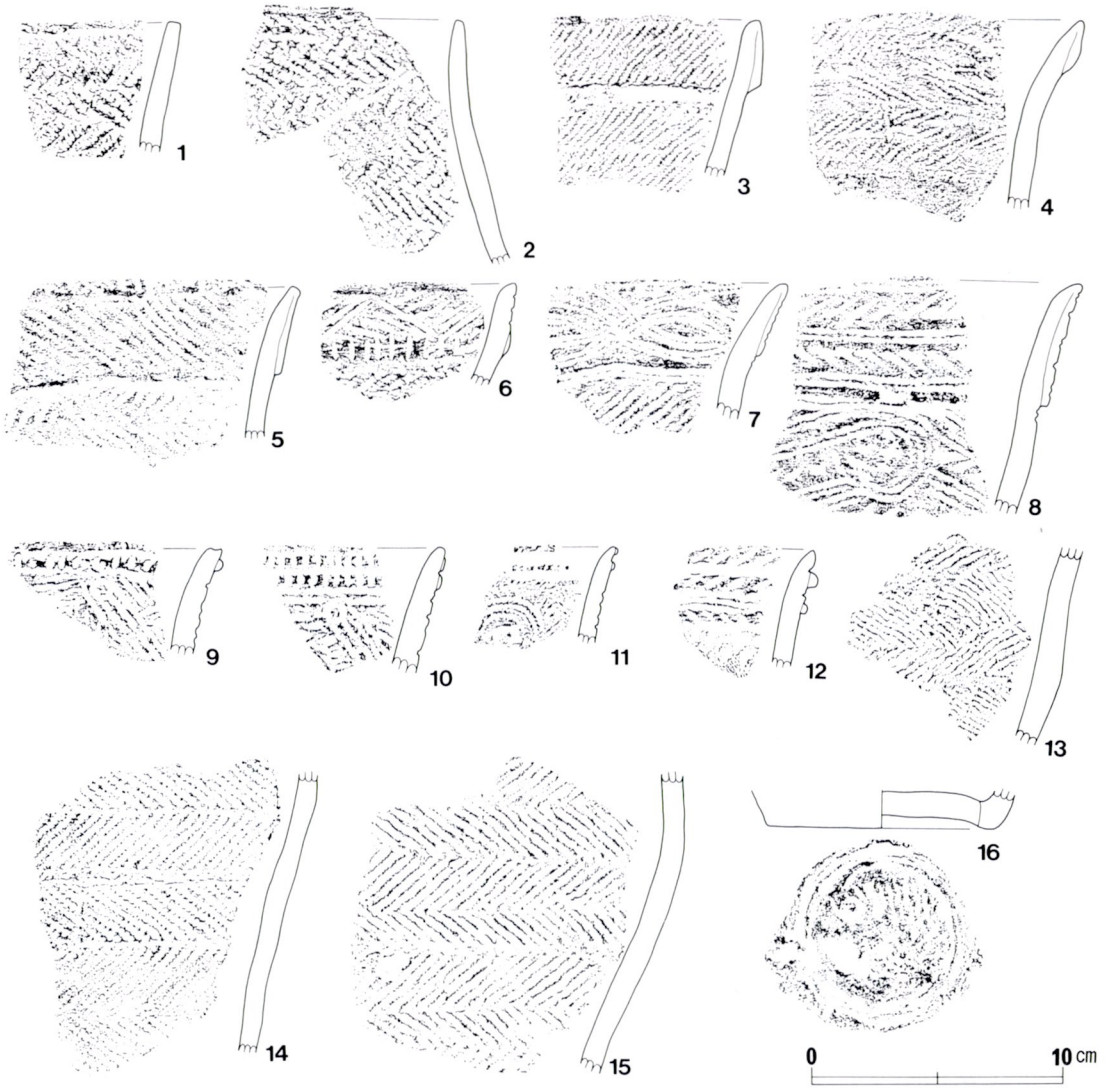


图15 大串貝塚第V層群出土土器拓影图

## 2. 第20層（第14図3～5）

## 第1類

3と4は1種に属する口縁部破片である。3は二段目に反の撚りをした原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ を結束させた縄文が施されている。黄茶褐色を呈し補修孔が認められる。4は口縁部を $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ の縄文により、胴部を $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ の縄文により施文されている。

## 第5類

5は沈線により鋸歯状のモチーフを口縁部に描き、撚糸圧痕文により蕨手状のモチーフを頸部に施している。頸部のモチーフ内には斜めの刺突がなされている。1種aに属する。

## 3. 第V層群（第12図2・3、第15図1～16）

## 第1類

1と2は2種に属する口縁部破片である。原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ と $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ により縄文が施されている。2は口縁が内傾し直立する器形のものである。1は第12層、2は第13層出土。

## 第2類

3は1種に属し原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ により縄文が施されている。第13層出土。4・5は2種に属し $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ と $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ により縄文が施されたものである。5は施文後ナデが施され、口唇部には刻目を施している。4・5とも第13層出土。

## 第3類

6は刻目のある細い隆帯により口縁部と胴部とを区画したものである。口縁部は沈線により鋸歯状のモチーフが施され、胴部は原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ の縄文が施されている。第13層出土。

## 第4類

第12図2は1種bに属するものである。口縁部は沈線により菱形状のモチーフを作出し、撚糸圧痕文を渦状に施した貼付文が付せられている。胴部は原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ と $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ との縄文が施されている。第13層出土。7は2種に属する口縁部破片である。口縁部は撚糸圧痕文による綾組状のモチーフが描かれ、胴部は原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ の縄文が施されている。第13層出土。

## 第5類

8と第12図3とは1種に属するものである。8は口縁部に撚糸圧痕文を施文後、沈線により綾杉状のモチーフを描き、頸部を撚糸圧痕文により蕨手状のモチーフを作出している。頸部のモチーフ内には斜めに刺突がなされている。第12図3は沈線に

より菱形状のモチーフを口縁部に施し、撚糸圧痕文と沈線とにより梯子状のモチーフと蕨手状と思われるモチーフを頸部に描いている。他の例から推察するならば、蕨手状の中心には円形竹管文が押捺されていると考えられる。いずれも第13層出土。

第7類

9～11は1種に属する口縁部破片である。いずれも口唇部直下に刻目のある隆帯を施し、9と10は撚糸圧痕文の先端に、11は蕨手状と思われるモチーフの中心に円形竹管文が押捺されている。9と11は第12層出土。10は第13層出土。12は口唇部と二条の隆帯に刻印をつけたもので2種に属する。第12層出土。

#### 胴部

13は原体RとLとによる無節縄文が施されている。第15層出土。無節縄文が施されている土器は極めて少ない。14と15は原体R $\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ とL $\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ とによる縄文が施されたものである。14は原体を結束させている。いずれも第13層出土。

#### 底部

16は底面にR $\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ の縄文が一部に施文されている。内面は黒色を呈する。第13層出土。

### 4. 第Ⅳ層群 (第12図1・4、第16図1～15)

#### 第1類

1は軸に左巻きと右巻きとの条を加えた単軸絡条体による網目状文が施されている。3種に属する。S20層出土。

#### 第2類

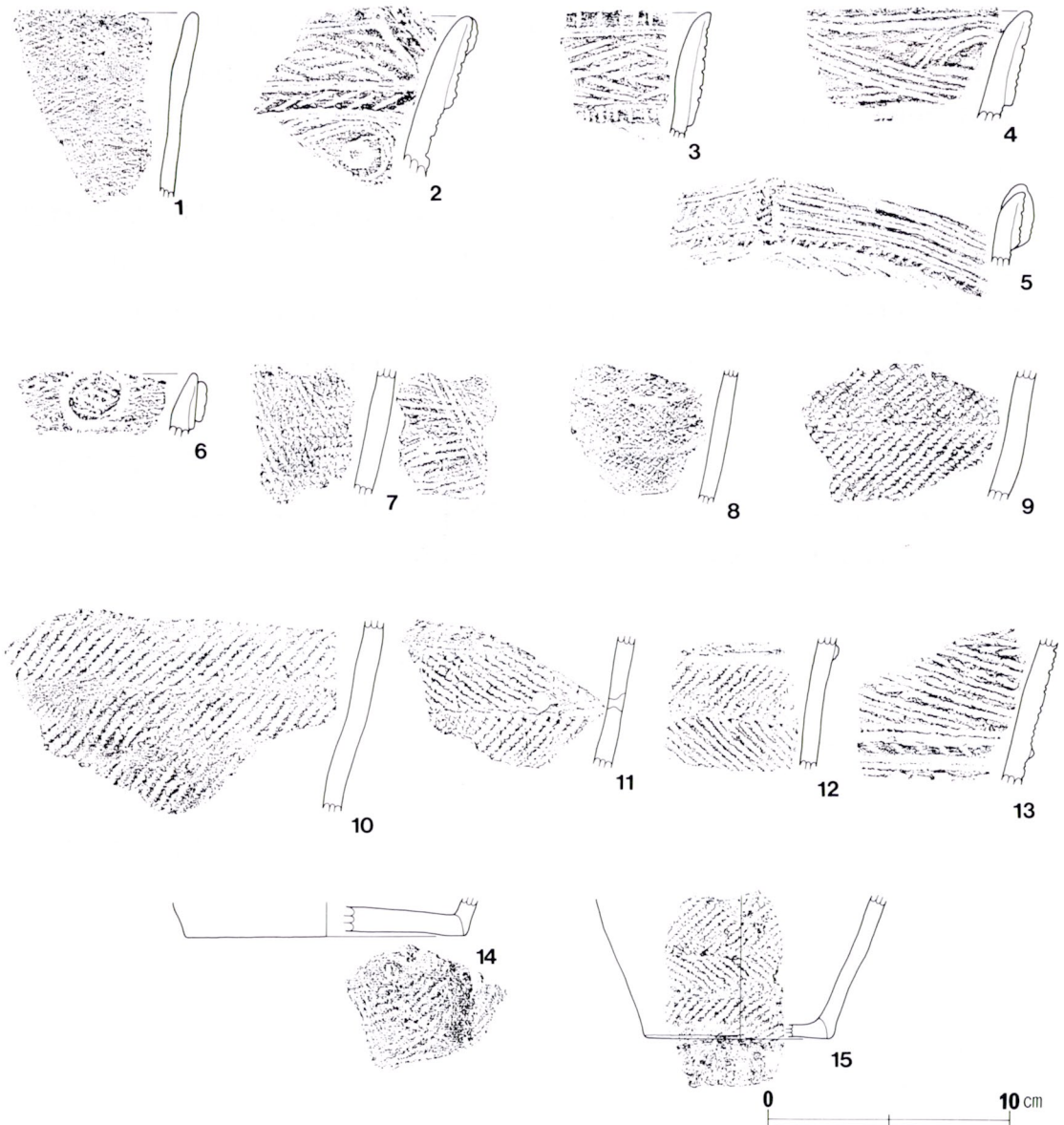
第12図1は口縁部に原体R $\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ の縄文を、胴体に原体L $\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right.$ とR $\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right.$ との縄文を施したものである。口唇部の一部に刻目が施されている。S29層出土。

#### 第5類

2は1種bに属する土器である。口縁部には口縁部直下と斜位に刻目のある隆帯が施され、沈線により菱形状のモチーフが描出されている。頸部には撚糸圧痕文により蕨手状のモチーフが作出され、その中心に円形竹管文が押捺されている。S29層出土。

#### 第6類

5は波頂から刻目のある短かい隆帯を垂下させているものである。隆帯の左側は沈線により鋸歯状のモチーフを施し、右側は平行させた撚糸圧痕文を施文している。頸部には撚糸圧痕文が認められる。S29層出土。



第16図 大串貝塚第IV層群出土土器拓影図

口縁部・頸部

第12図 4は頸部に刻目のある二条の隆帯を施した後、撚糸圧痕文により綾組状のモチーフを描出し沈線を充填させている。胴部には原体 $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right.$ の縄文が施されている。S29層出土。3は沈線により菱形状のモチーフが描出されているものである。口唇部直下と口縁部直下には刻目が施されている。S29層出土。4は撚糸圧痕文により波状のモチーフが施され、斜めに刺突がなされている。S29層出土。6は左巻きと右巻きとの条を加えた単軸絡条体による網目状文が施され、沈線により菱形状のモチーフを描出した貼付文が付せられたものである。S29層出土。

## 胴部

7は外面に原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ の縄文を施文後、アナガラ属の貝殻腹縁により条痕文を斜位に施し、内面には横および斜方向に条痕文を施したものである。条痕文が施されているものは極めて少ない。S 29層出土。8は左巻きと右巻きとの条を加えた単軸絡条体による網目状文が施されている。S 29層出土。9と10とは原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ による縄文が施されている。9は原体を結束させている。いずれもS 29層出土。11と12は原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ と $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ とによる縄文が施されている。11は補修孔があげられ、12は隆帯が施されている。いずれもS 29層出土。13は刻目のある隆帯の上下に平行させた撚糸圧痕文を施文後、斜めに刺突を加えたものである。S 29層出土。

## 底部

14は底面に原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ の縄文を施したものである。S 29層出土。15は胴部に原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ と $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ との縄文を施文したものである。S 29層出土。

## 5. 第Ⅲ層群 (第13図1、第17図1～23)

### 第1類

1は4種に属し斜位にクシガキ文が施されているものである。破片下端に原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ の縄文がわずかに認められ、胴部は縄文が施文されるものと考えられる。S 18・19層出土。2は5種に属する無文のものである。横位にナデが施されている。S 20・21層出土。

### 第2類

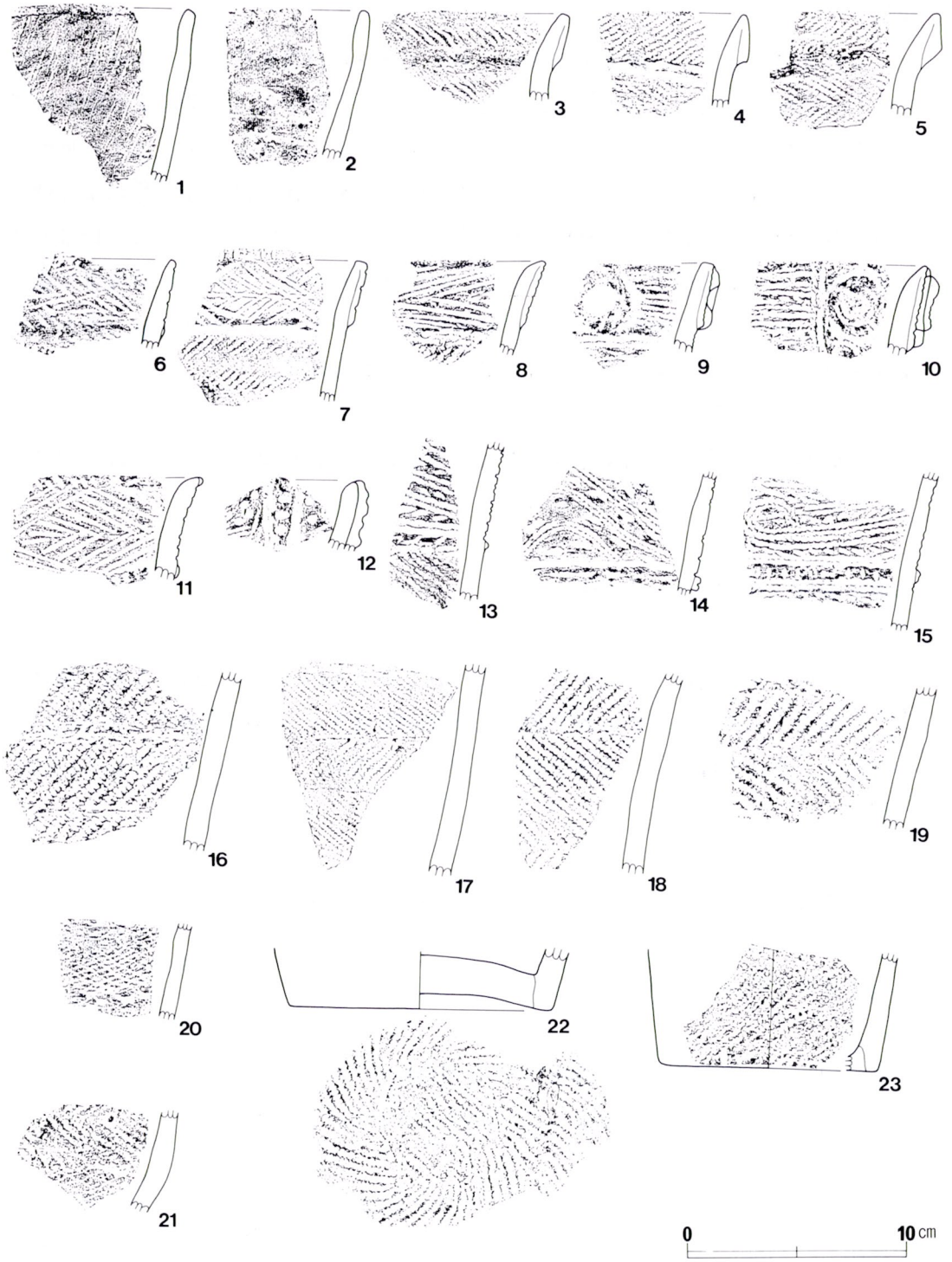
3は1種に属し口縁部・胴部ともに原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ による縄文が施されている。S 26層出土。4と5は2種に属し、口縁部を原体 $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ により胴部を原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ と $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ とにより施文されている。4はS 17・23層出土。5はS 26層出土。

### 第3類

6は口縁部と胴部とを細い隆帯によって区画し、口縁部を沈線により菱形状のモチーフを描出させたものである。波状口縁を呈する。S 17層出土。

### 第4類

7と8は1種aに属するものである。7は口縁部の沈線により菱形状のモチーフを描出し、胴部に原体 $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ と $R\left\{\begin{smallmatrix} L \\ L \end{smallmatrix}\right\}$ との縄文が施されている。口唇部には刻目が施されている。S 26層出土。8は口縁部に沈線により綾杉状のモチーフを作出し、胴部には $L\left\{\begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix}\right\}$ の縄文を施したものである。口唇部直下には浅い刺突がなされている。S 25層出土。



第17图 大串貝塚第三層群出土土器拓影图

## 第5類

9は2種aに属し口縁部に平行させた撚糸圧痕文を施し、刻目のあるドーナツ状の貼付文が付せられている。頸部には撚糸圧痕文が施文されている。S25層出土。

## 第8類

第13図1は2種に属し刻目のある隆帯により文様帯を形成するものである。隆帯の間には刺突文が充填され、口唇部直下には刻目が施されている。胴部は原体LとRとの無節縄文が施文されている。S25層出土。

## 口縁部

10は渦状の撚糸圧痕文が施された貼付文を有するものである。貼付文の両端には隆帯を垂下させており、口縁に平行させた撚糸圧痕文を施している。S26層出土。11は沈線により菱形状のモチーフを描出させたものである。口唇部と口縁部の直下には刻目が施されている。S25層出土。12は波状を呈し波頂部から刻目のある隆帯を垂下させたものである。隆帯の両端には撚糸圧痕文が施され刺突がなされている。第8類1種に属するものと考えられる。S23層出土。

## 頸部・胴部

13～15は刻目のある隆帯を有し撚糸圧痕文が施され刺突文が充填されるものである。13は隆帯により頸部と胴部とを区画している。14と15は撚糸圧痕文により14が波状のモチーフを15が蕨手状のモチーフを描出している。いずれもS17層出土。16は結束させた原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ により縄文が施されたものである。S25層出土。17～19は原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ とR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ との縄文が施されたものである。17はS20・21層、18はS18・19層、19はS17層出土。20と21は左巻きと右巻きとの糸を加えた単軸絡糸体による網目状文を描いたものである。21の上面には原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ とR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ とによる縄文が施されている。いずれもS26層出土。

## 底部

22は底面全体に原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ による縄文が施され上げ底を呈するものである。S25層出土。23は原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ による縄文が胴部に施されたものである。S20・21層出土。

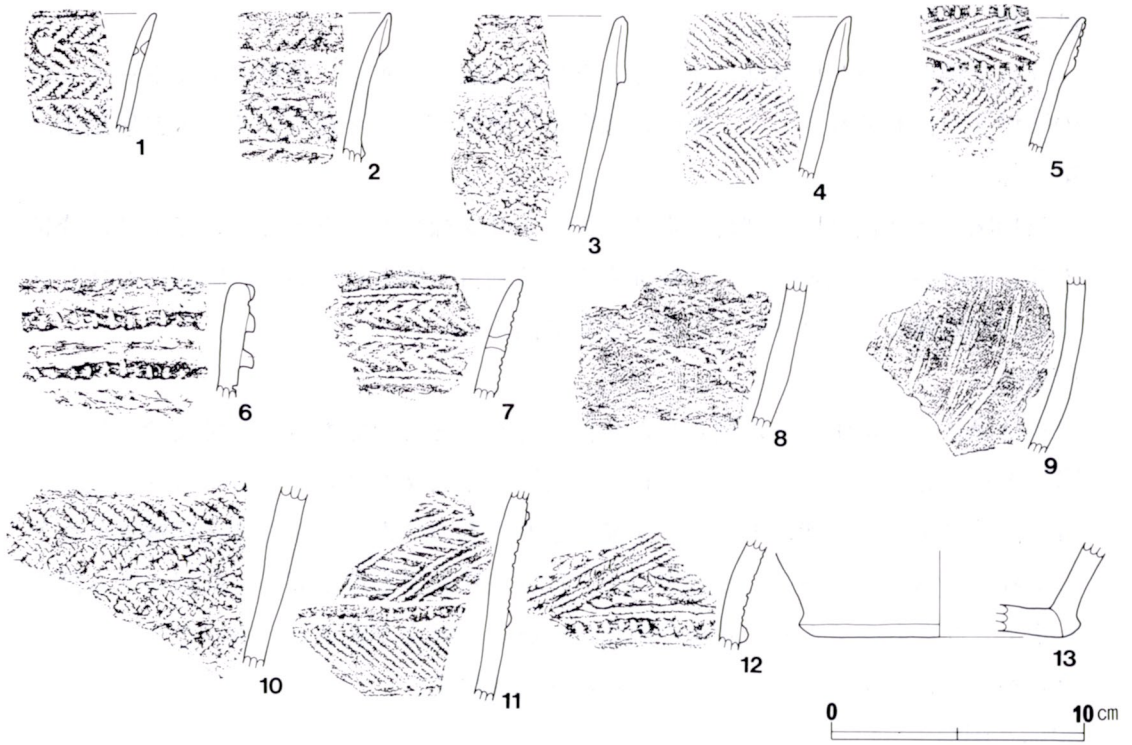
## 6. 第I・II層群 (第18図1～13)

## 第1類

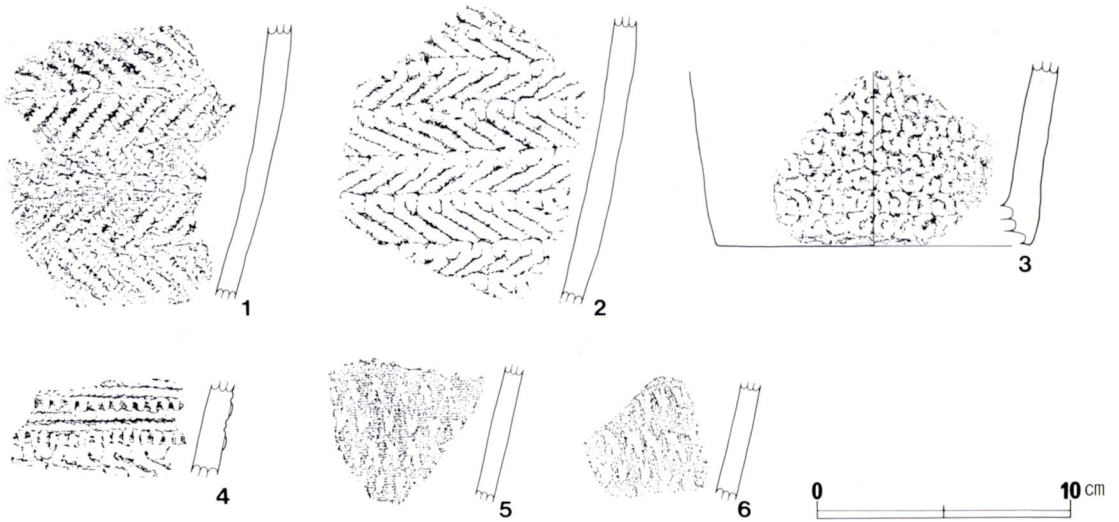
1は2種に属し原体L $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right\}$ とR $\left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \right\}$ とにより縄文が施されたものである。両側が補修孔があけられているが貫通していない。S9～S15層出土。

## 第2類





第18図 大串貝塚第I・II層群出土土器拓影図



第19図 大串貝塚第11層出土土器拓影図

2～4は2種に属し原体 $L\left\{\begin{matrix} R \\ L \end{matrix}\right.$ と $R\left\{\begin{matrix} R \\ L \end{matrix}\right.$ により縄文が施されたものである。2はS13層、3はS11層、4はS2層出土。

## 第4類

5は1種aに属し口縁部を沈線により鋸歯状のモチーフを描出し、胴部を原体 $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ により縄文を施したものである。口唇部と口縁部直下には刻目が施されている。S 9～S 15層出土。

## 第7類

6は刻目のある隆帯を連出させ刺突文を充填させているものである。S 13層出土。

## 口縁部

7は撚糸圧痕文を施文後、沈線により綾杉状のモチーフを描出させているものである。補修孔があげられている。S 9～S 15層出土。

## 頸部・胴部

8は左巻きと右巻きとの条を加えた単軸絡条帯により網目状文を施している。S 13層出土。9はヘラ状工具により斜位にミガキが施されている。S 2層出土。10は太い原体 $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ と $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ とにより縄文が施されている。S 9～S 15層出土。11は刻目のある隆帯により頸部と胴部とを区画したものである。頸部は撚糸圧痕文と沈線文とにより梯子状のモチーフを描出させ、胴部は原体 $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ と $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ とにより縄文が施されている。S 1層出土。12は刻目のある隆帯を施し、撚糸圧痕文を施文後、斜めに刺突文を充填させたものである。S 1層出土。

## 底部

13は底部が外反するもので、原体 $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ の縄文が施文されている。S 2層出土。

## 7. 第11層（第19図1～6）

## 胴部・底部

1は原体 $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ と $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ とによる縄文が施されている。2と3は原体 $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ と $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ とのループ文による2は条を長くして3はループ部分のみを施文している。4は刻目のある微隆帯文により頸部と胴部とを区画したもので、胴部には原体 $R\left\{\begin{matrix} L \\ L \end{matrix}\right\}$ と $L\left\{\begin{matrix} R \\ R \end{matrix}\right\}$ とによるループ文が施されている。11層にはループ文が施文されている土器が多い。

## 第4土器群

5と6は同一個体である。アナガラ属の腹縁を用いて支点を交互に移動させてジグザグ文を描いている。黄茶褐色を呈し焼成は良好である。

## 2. 石器

### 削器（第20図1・2）

1は側縁に自然面を残す隅丸方形の剥片を素材としている。バルブ方向のみにかぎり数度に亘る調整が認められるのは、薄く成形しようとする反映であるかと思われる。石器の底辺と思われる下端にはブランチングを施して刃部を形成している。脱灰を受けている。石質はホルンフェルスで30gを量る。S11層出土。

2は扁平な円礫を素材としている。片面だけを荒く周囲から調整を加えた後、下端を階段状に調整を加えることによって刃部を形成している。98gを量る。S9～S15層出土。

### 石斧（第20図3）

3は角柱形の礫を素材として、裏面の大部分に自然面を多く残すものである。両側面に階段状剥離を施すことによって内湾した基部を作出し、刃部は下端を両面加工による調整を施すことによって形成している。表面全体に亘り脱灰が観察できる。402gを量る。S13層出土。

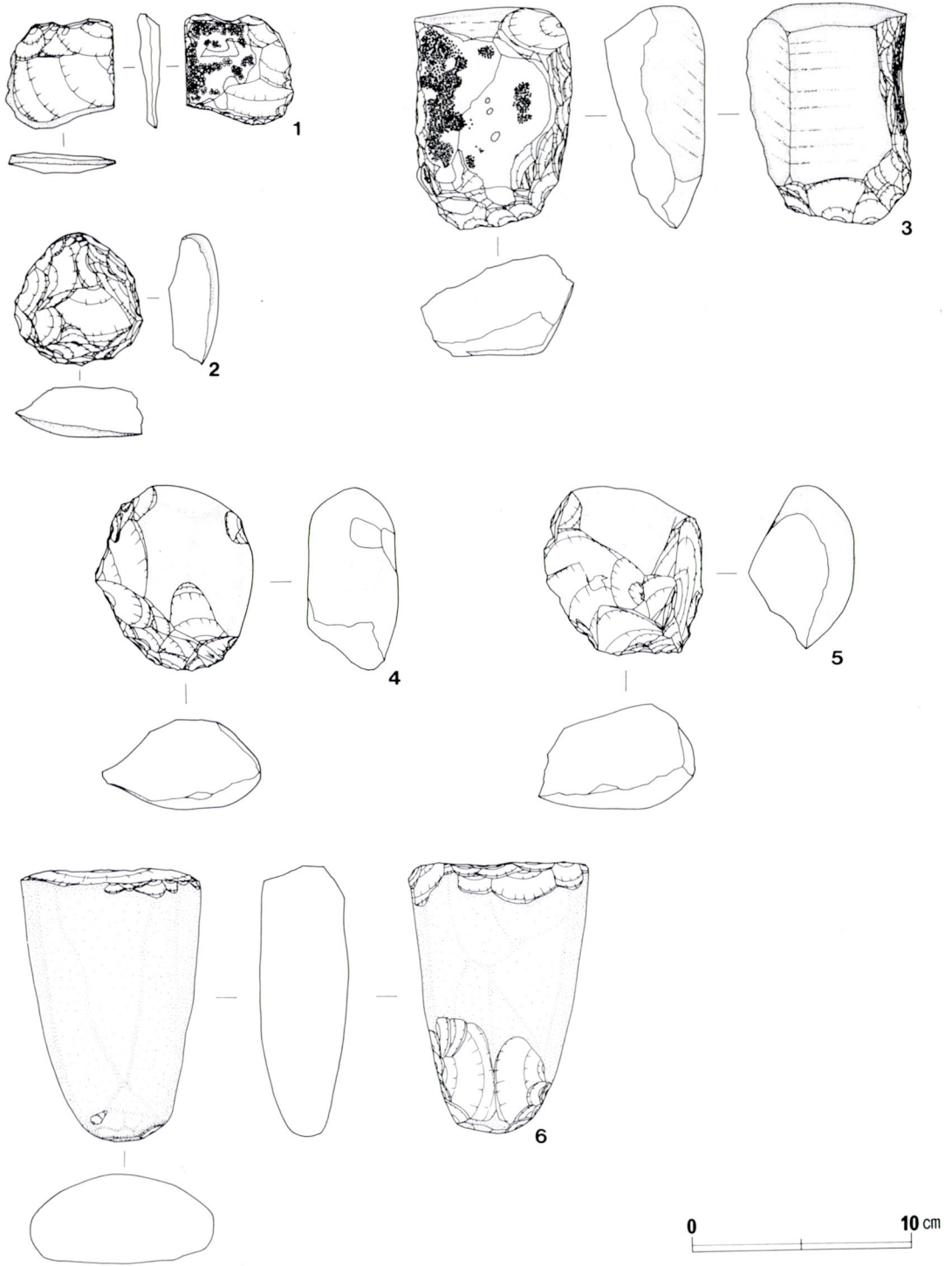
### 礫器（第20図4・5）

4は円礫を素材として、側縁部に荒い加工を有している。調整は片面加工によってなされ、刃部も同様に作出している。石質はホルンフェルスで295gを量る。表採。

5は円礫を素材として、大きさを調整するために同一打点を左右に打ち欠いて剥ぎ取りを行っている。下端を階段状に片面調整することによって刃部を形成している。石質はホルンフェルスで299gを量る。表採。

### 敲石（第20図6）

6は紡錘形の礫を素材としている。基部は欠損しているが、剥離後の調整が認められることから、大きさを減ずるためにしたものかと思われる。端部には敲打痕が認められ、下端になるにしたがって先細りとなっている。598gを量る。B<sub>2</sub>地点表採。



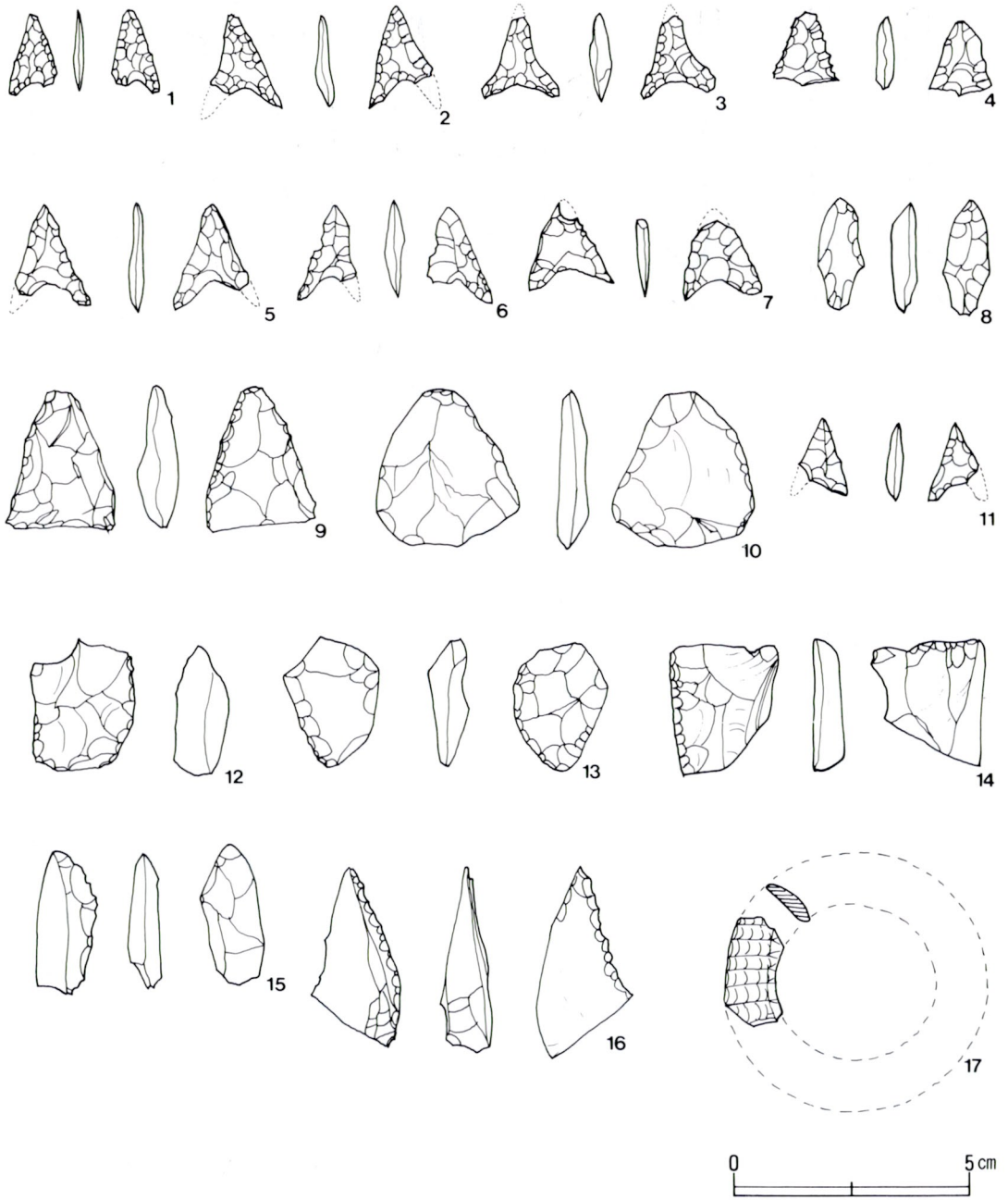
第20図 大串貝塚出土石器実測図

## 石鏃・剥片利用石器

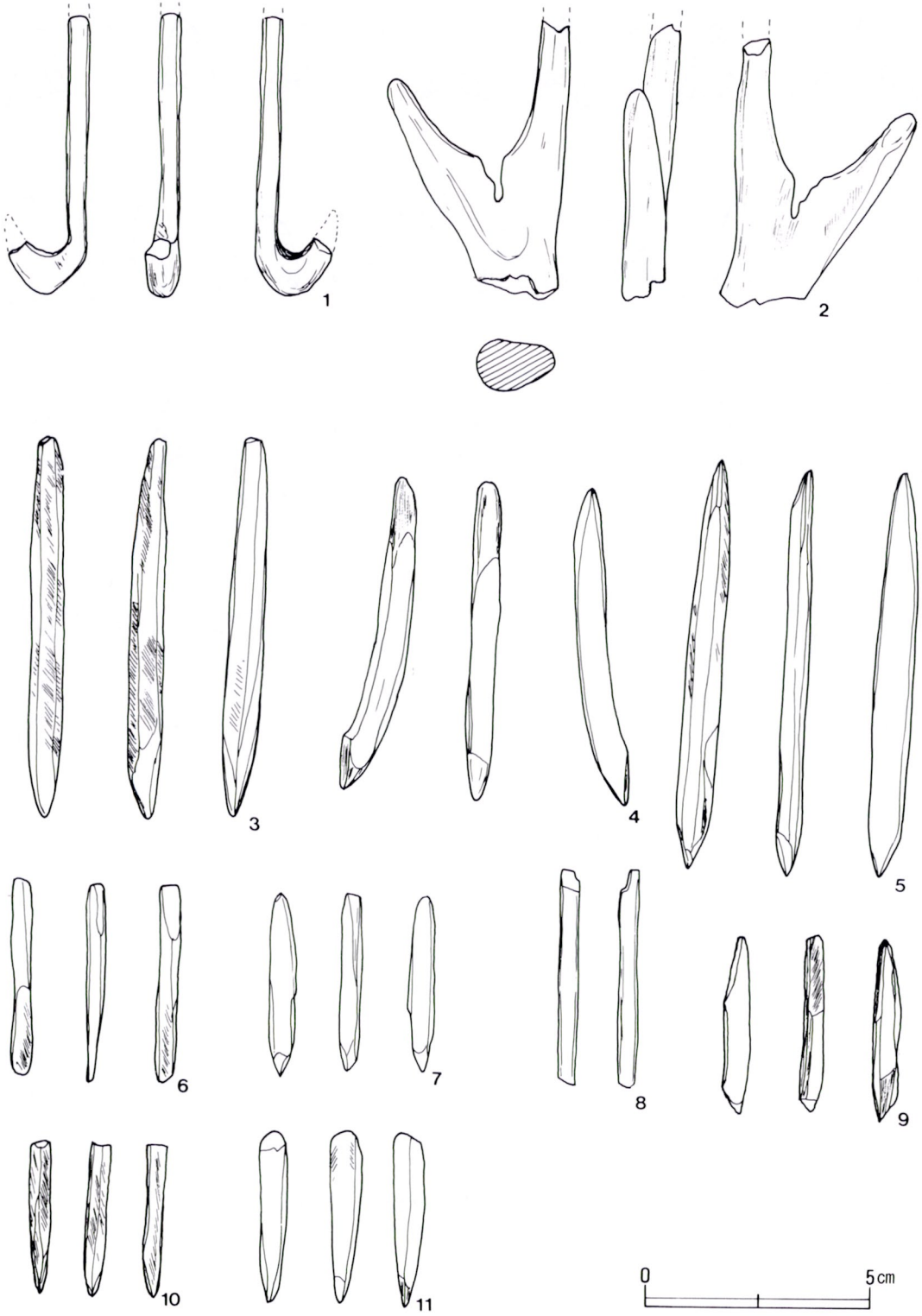
報告書に掲載したものは定形もしくはそれに近いものに限定した。石鏃の一部とみられるものや剥片利用の石器についても明確な再調整が認められるもの以外はすべて割愛した。掲載資料は次の計測値によって示す。

第2表 大串貝塚出土石鏃・剥片利用石器一覧表（単位はcm）

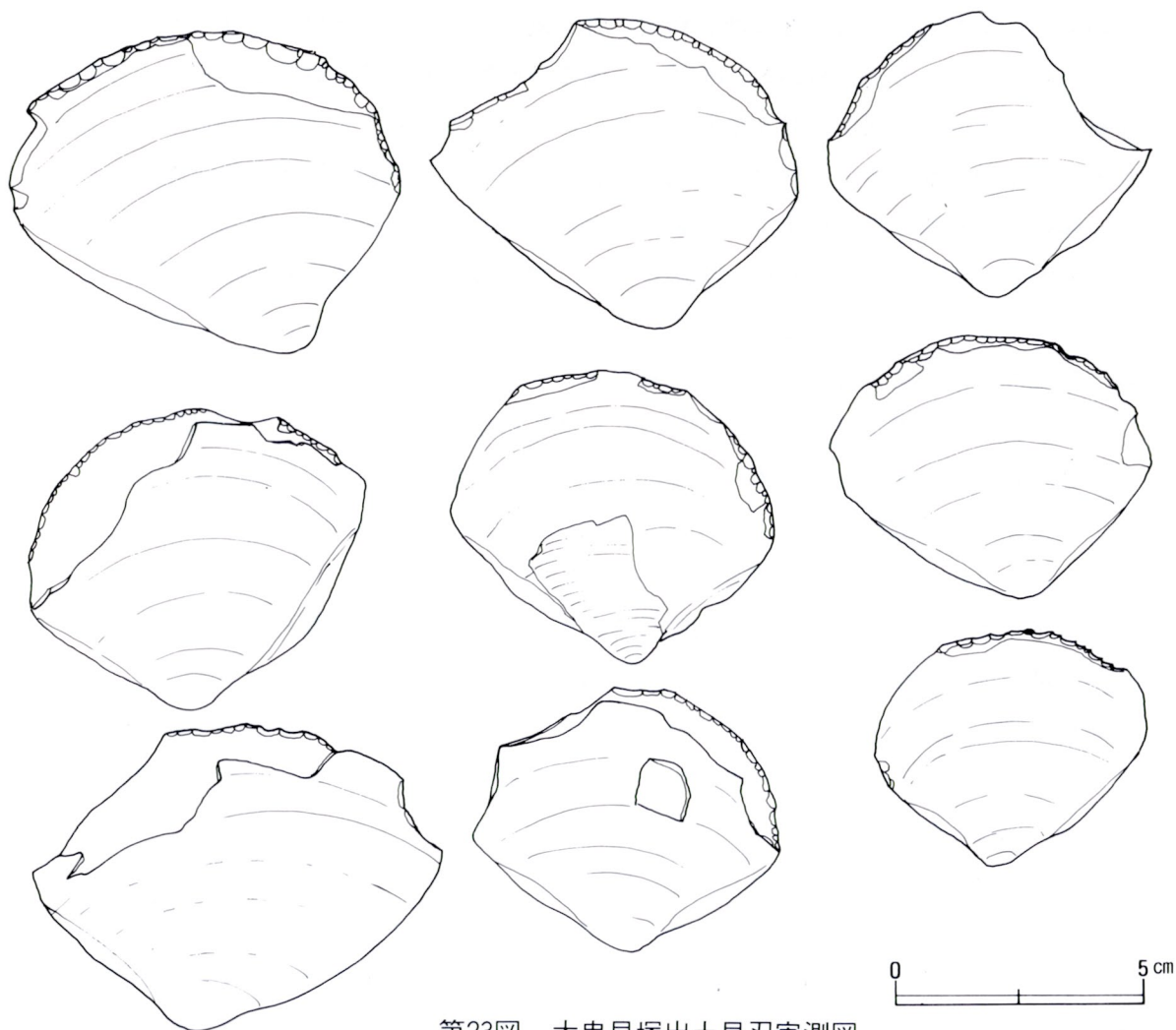
	器種	材質	全長	最大幅	厚さ	出土層位	備考
1	石鏃	チャート	1.7	1.2	0.2	S26層	
2	石鏃	チャート	2.3	1.7	0.2	第12層	
3	石鏃	チャート	1.9	1.7	0.4	第12層	先端欠
4	石鏃	赤色チャート	1.6	1.4	0.3	第11層	
5	石鏃	チャート	2.4	1.1	0.4	S25層	
6	石鏃	安山岩	2.1	1.4	0.4	第12層	
7	石鏃	赤色チャート	1.7	1.8	0.3	S29層	先端欠
8	石鏃未製品	チャート	2.4	1.1	0.4	S25層	
9	石鏃未製品	メノウ	4.1	2.4	0.8	S11層	
10	石鏃未製品	チャート	3.4	3.2	0.6	S1層	
11	石鏃	チャート	1.7	1.1	0.3	第11層	
12	剥片利用	チャート	2.8	2.1	1.1	第11層下部	側縁利用
13	石鏃未製品	チャート	2.7	2.1	0.8	S29層	
14	剥片利用	チャート	2.8	2.9	0.6	第11層	側縁利用
15	剥片利用	チャート	2.7	1.2	0.7	S24層	側縁利用
16	剥片利用	チャート	4.0	2.2	1.0	S17層	ドリル (?)



第21図 大串貝塚出土石器・貝輪実測図



第22図 大串貝塚出土骨角器実測図



第23図 大串貝塚出土貝刃実測図

### 3. 骨角器・貝器

今回の発掘調査によって検出された骨角器・貝器は釣針1点、釣針未製品1点、刺突具8点、貝輪1点、貝刃44点である。調査規模に対して種類及び点数が非常に多いことは注目に値するものであろう。貝刃は44点のうち完形品の11点のみを本報告書に掲載した。

釣針 鹿角の叉状部を用いたものであり、先端部と結縄部（チモト）を欠失している。したがって鉤（アグ）の有無については明確ではない。全体として軸部は弯曲せず直接的であり、やや太めである。現存長6.2cm、軸幅5mmを測る。S26層出土。

釣針未製品 攪乱層から出土したものである。鹿角の叉状部を用いている。製法は削りではなく、砥ぐような形で成型していくものと思われる。現存長6.0cmを測る。



刺突具 第22図3～11。3は鹿骨利用。骨を縦割し、これを研磨して作ったものと思われる。全長8.4cm、軸幅8mmを測る。両端は研磨され、特に刺突部は鋭い。S29a層出土。4は鹿骨利用。骨を縦割し、さらに研磨して弯曲するように整形したものである。全面に削りおよび研磨痕が明瞭に認められる。S29a層出土。5は全長9.2cm、軸幅8mmを測り今回検出された刺突具中最大である。製作過程、材質は前者に同じ。S25層出土。6は鹿骨利用。両端を欠く、現存長4.4cm、軸幅約4mmを測る。2～4に対して小型である。S26層出土。7は定形の小型刺突具。鹿角利用。縦割面を残し先端部のみ研磨する。S2・S17層出土。8は骨針と思われるが両端を欠くために不明。全体的に熱を受け黒ずんでいる。S29b層出土。現存長4.7cm、軸幅約4mm。9は小型刺突具。先端をやや欠くがほぼ完形に近い。縦割した骨に研磨を施して作出しているが自然の割裂面を残している。西壁セクション面より検出。10は一端を欠くが完形に近いものと思われる。鹿骨を利用したものであり、きれいに研磨されている。S23層より出土。11は完形の小型刺突具である。先端を研磨して鋭利に作出する。その他の部分では自然面が残される。S25層出土。

貝輪 第21図17に示す。ベンケイガイを用いている。内外面ともきれいに研磨されている。現存する部分は全体の6分の1程度であり僅かである。復元計測では直径約5.6cm、内径3.4～3.5cmである。S25層出土。

貝刃 検出された点数は44点である。層位はS1層から2点、S2層から1点、S9～S15層から9点、S17層から1点、S18・S19層から1点、S20・S21層から1点、S24層から5点、S25層から5点、S26層から1点、S29a層から1点、S29層から1点である。その他は攪乱層あるいは自然遺物洗浄中の発見であるために出土層位を特定できなかったものである。実測図1はS29a層、2・5はS1層、3・4・9はS24層、6はS9～S15層、7はS29層、8はS26層から出土したものである。貝刃は各層に普遍的に認められているが、とりわけ魚骨の出土量の顕著な層中に多く含まれている。概して大型のハマグリを用いている。出土数44点のうちハマグリを用いたものが43点を占める。

脱稿後、未洗浄の第12層サンプルおよび貝層サンプルを再検討中に釣針、刺突具(ヤス類)、イタボカキ製の貝輪破片を検出した。未洗浄の第12層サンプルが若干あり、増加する可能性が残されている。別の機会に報告したい。

第3表 大串貝塚各層出土石材別一覧表 (石器含む)

層位	種類	点数	層位	種類	点数
S1層	チャート	8	S13層	メノウ	3
	メノウ	3		石英	1
	砂岩	1	砂岩	1	
	安山岩	1	S15層	砂岩	1
S2層	メノウ	1		チャート	3
	チャート	3	S17層	玉ズイ	1
S5層	チャート	3		砂岩	1
	メノウ	3	S19層	チャート	1
	安山岩	1		S20層	チャート
S7層	メノウ	6	メノウ		1
	チャート	5	S18～21層	チャート	2
	赤色チャート	1		砂岩	2
	砂岩	3	S22層	チャート	2
S9～15層	泥岩	1		砂岩	2
	チャート	4	S23層	チャート	1
	砂岩	2		砂岩	1
S11層	チャート	15	S24層	玉ズイ	1
	メノウ	4		S25層	チャート
	淡白石	1	メノウ		2
	安山岩	3	頁岩		1
	流紋岩	1	黒曜石		6
S12層	チャート	13	S29層	チャート	21
	メノウ	8		メノウ	3
	砂岩	7		玉ズイ	2
	安山岩	1		砂岩	4
	赤色チャート	1		頁岩	1
S13層	赤色チャート	2	石英	1	
	チャート	17	安山岩	1	

種類	点数	比率
チャート	120	57.7
メノウ	34	16.3
砂岩	28	13.5
黒曜石	6	2.9
赤色チャート	4	1.9
安山岩	4	1.9
玉ズイ	4	1.9
頁岩	3	1.4
石英	2	1.0
泥岩	1	0.5
淡白石	1	0.5
流紋岩	1	0.5
計	208	100%

注) 自然遺物洗浄中にもかなりの石片の出土がみられるが、それらについては未集計である。従って点数はさらに増加するものであることを付記しておく。

## ま と め

大串貝塚は著名な貝塚であり、多くの研究者によって注目されてきたにもかかわらず、貝塚そのものの基本的データは昭和11年の大山史前学研究所と昭和24年の酒詰伸男氏による発掘調査による資料に依存していたといえよう。戦後、貝塚の調査・研究は飛躍的に前進をとげ、貝塚を構成する自然遺物から当時の食生活の復元だけではなく生活環境、自然環境の復原もおこなわれるようになった。こうしたことは貝塚の構造の把握なしには不可能である。しかし、大串貝塚はその基本的部分におけるデータ不足によって、那珂川流域の前期縄文時代の復原の上で力不足であることを拒めなかったといえよう。

今回の発掘調査は大串貝塚の平面分布と垂直分布について正確に把握することにあつた。といっても、無造作に貝層のひろがりを押えればよいというわけではなく、それぞれの箇所において可能な限りの情報を記録にとどめ学術資料として十分に研究に資するものでなければならない。今回の調査は主トレンチのみを可能な限り、忠実に記録したのは今後の調査・研究の上で確固たる縦軸を作っておこうとしたためである。こうした作業を踏まえて大串貝塚の調査の成果として次の点があげられよう。

1. 大串貝塚の貝層の遺存状況はきわめて良好であり、各地区ともほとんど攪乱をみることなく堆積している。さらに、本貝塚は貝層の切れる洪積台地斜面部から沖積低地面にかけての腐植土層中に良好な遺物包含層が存在する。本層中からは土器片だけではなく堅果類も豊富に検出されている。本層はあたかも縄文前期の「タイム・カプセル」の様相を呈しておりこれらを含む全的保存が必要であろう。しかし、腐植土層中の遺物包含層の在り方の追求は今回は日程的に部分的な把握にとどまっており、詳細は今後の調査・研究に委ねられよう。
2. 大串貝塚人の生活文化の内容については、今回の調査によって新しい事実が豊富に追加された。狭い調査面積にもかかわらず出土した骨角器・貝器は質・量ともに予測をはるかに越えていた。これらによって大串貝塚の重要性は縄文前期文化の研究の上で不動の地位を占めるであろう。
3. 今回の調査のもう一つの特色は自然遺物の種類および量的把握に尽力したことである。採集した資料の全面的な分析は出来なかったが、基本的なデータについては提示できたものと思っている。
4. 今回の調査地点から検出された土器片はきわめて少量の混入を除けば花積下層式の新しい部分の型式に属している。このことは花積下層式土器の編年研究の基礎資料となるものであろう。大串貝塚からは花積下層式以降の土器型式も検出され

ているから、将来の調査・研究によって比較・研究を可能にしていくものと思われる。

5. 大串貝塚は縄文前期・花積下層式土器を出土する貝塚としては最大規模を有する貝塚の一つであり、その保存状況の良好なこと、さらに低湿地（沖積地）へ包含層がのびていくことを考えるときに、全国的にみても類例の少ない良好な遺跡の一つであるといえよう。そういう意味において国の史跡指定地域の拡大を含む保存が重要な課題となるものと思われる。



図版1 大串貝塚B<sub>i</sub> 地点トレンチ  
18~25区遠景



図版2 大串貝塚B<sub>i</sub> 地点トレンチ  
18~25区近景



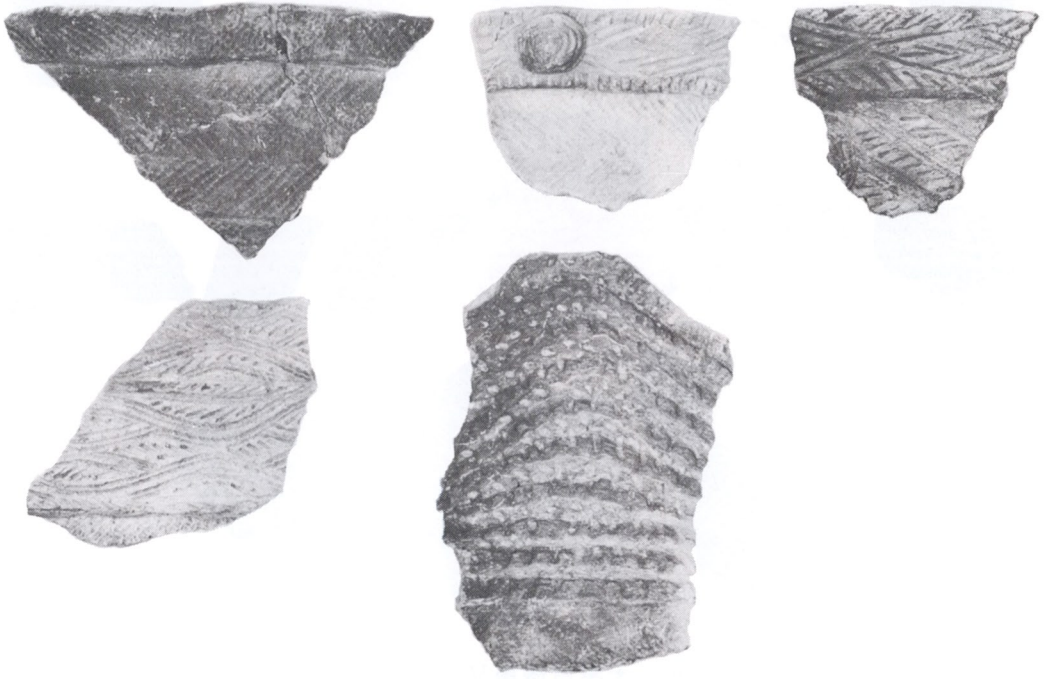
図版3 大串貝塚B<sub>i</sub> 地点トレンチ 18~23区東壁セクション



図版4 大串貝塚B<sub>i</sub> 地点トレンチ20~24区西壁セクション



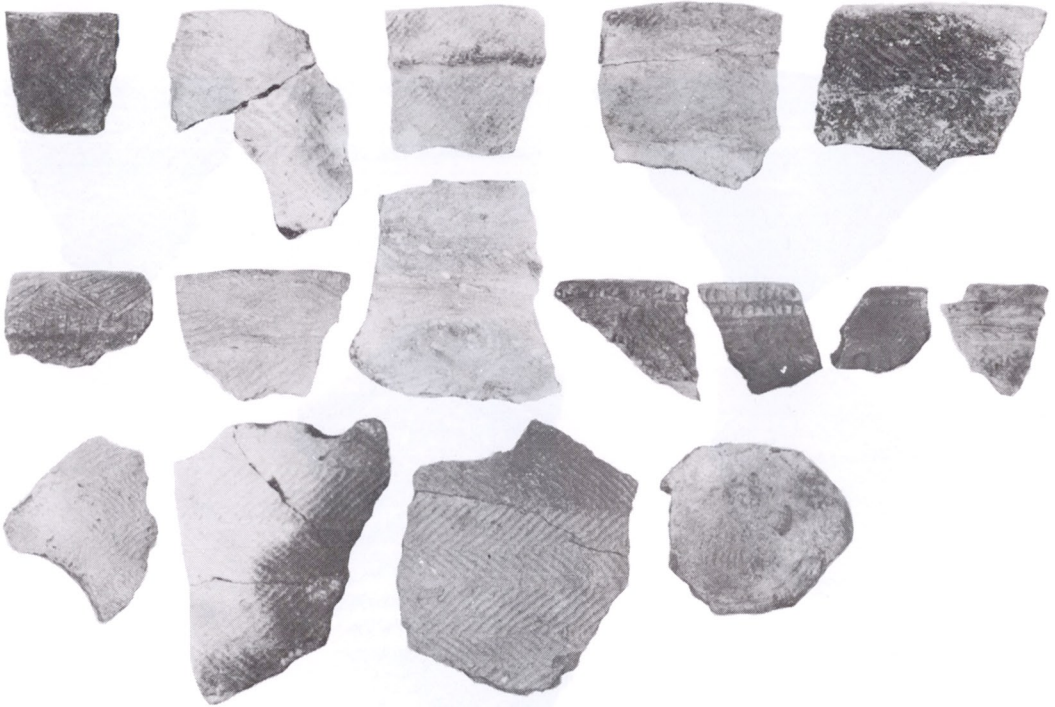
図版5 大串貝塚B<sub>i</sub> 地点トレンチ15~18区東壁セクション



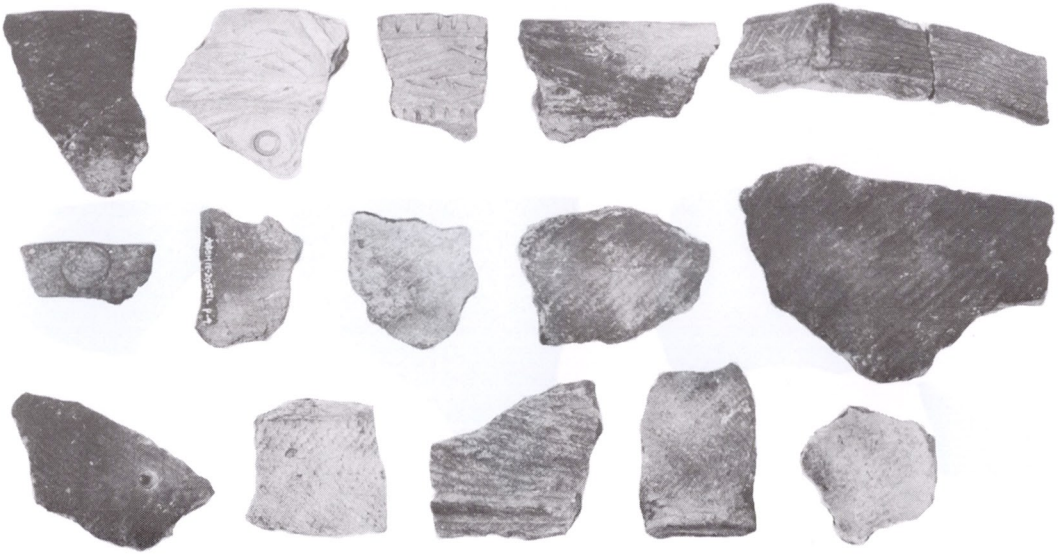
図版6 大串貝塚出土実測土器



図版7 大串貝塚第32層・第20層出土土器

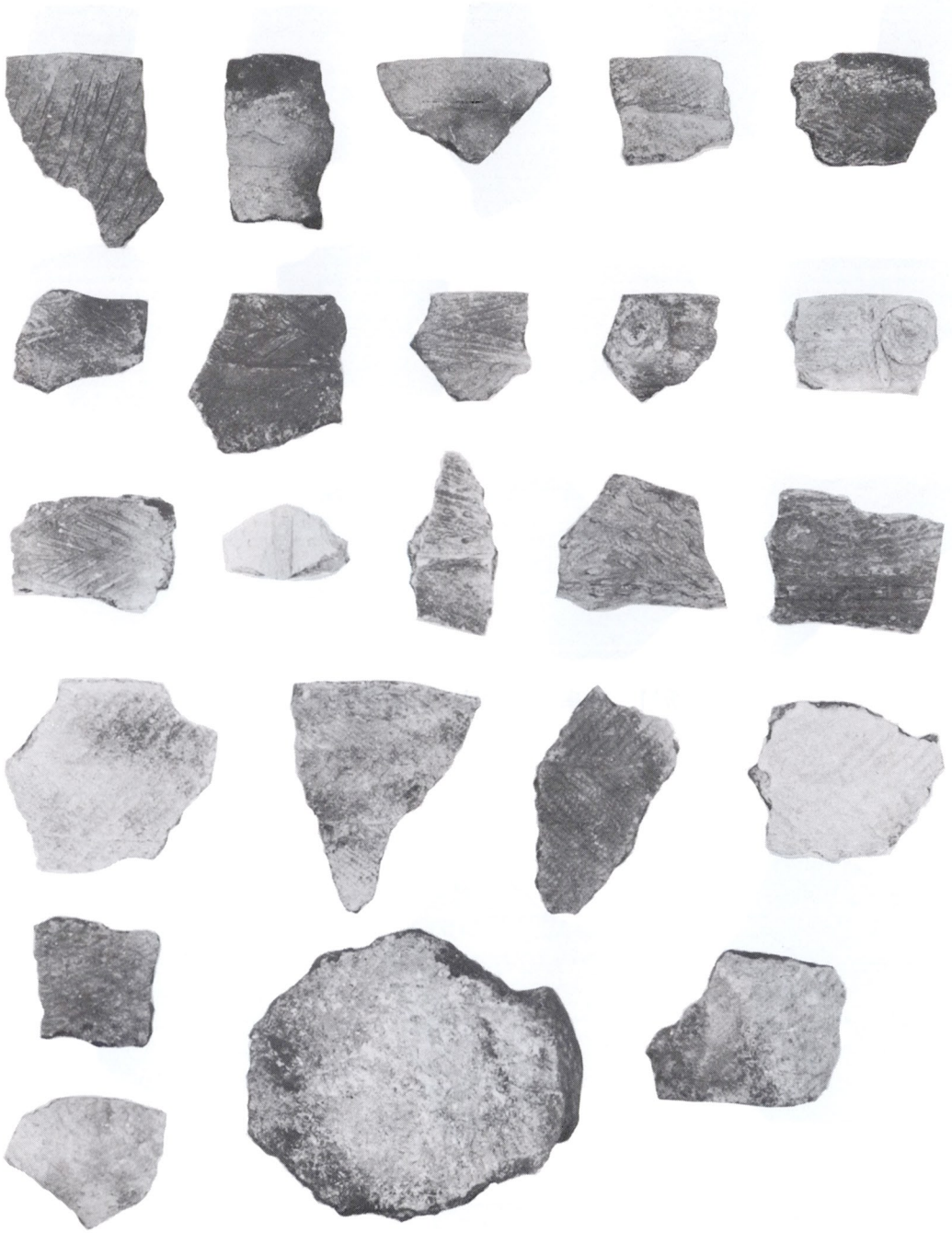


図版 8 大串貝塚第V層群出土土器



図版 9 大串貝塚第IV層群出土土器

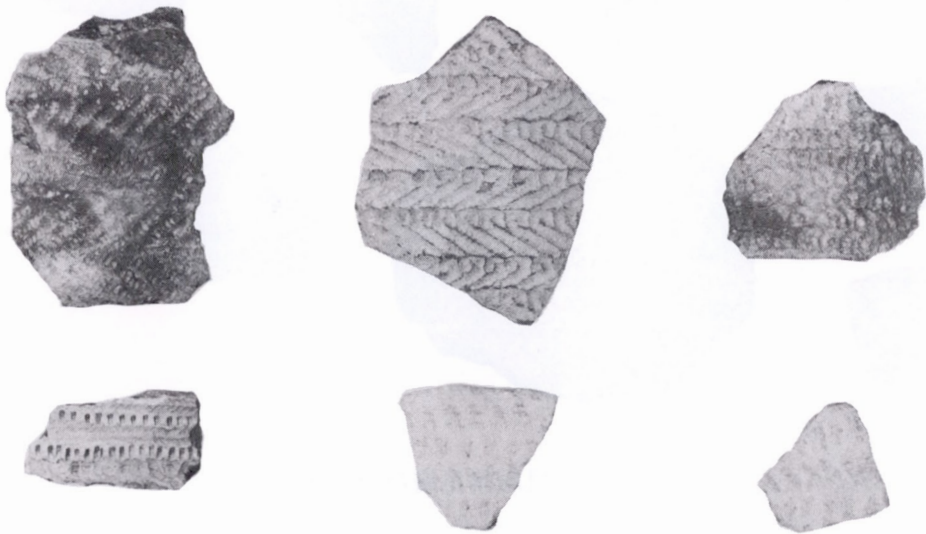




图版10 大串貝塚第Ⅲ層群出土土器



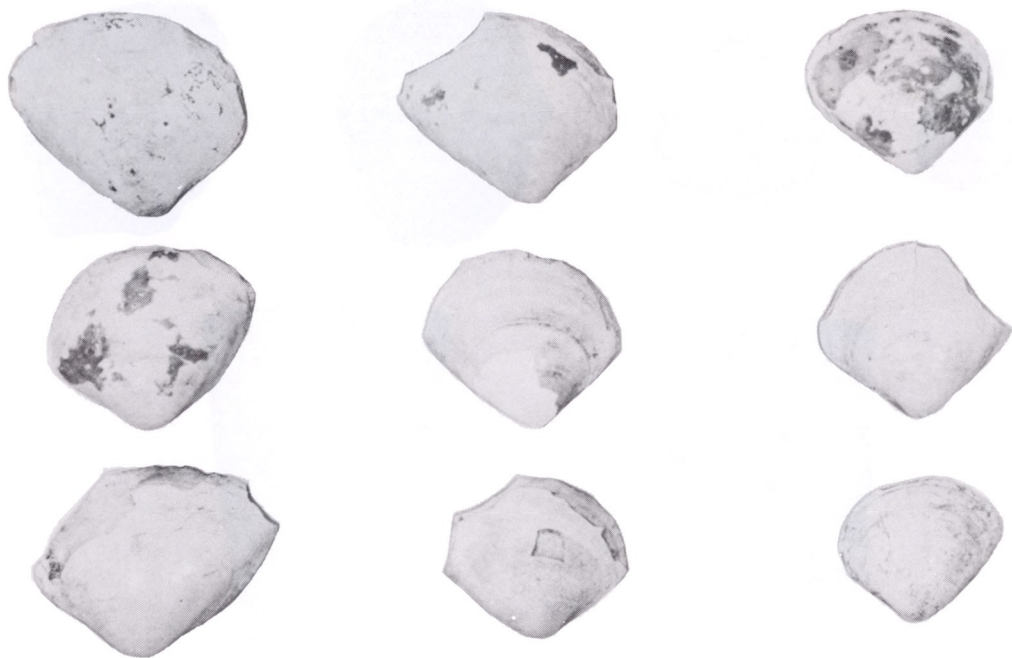
图版11 大串貝塚第I・II層群出土土器



图版12 大串貝塚第11層出土土器



图版13 大串貝塚出土石器



图版14 大串貝塚出土貝刃



图版15 大串貝塚出土骨角器

常澄村埋蔵文化財調査報告 第2集

大串貝塚

昭和61年3月31日発行

編集 大串貝塚調査団

発行 常澄村教育委員会  
茨城県東茨城郡常澄村大串2134  
TEL 0292-69-2213

印刷 コトブキ印刷株式会社  
茨城県水戸市千波町2398-1  
TEL 0292-41-1000

常澄村埋蔵文化財調査報告 第2集

大串貝塚 正誤表

頁	行	誤	正
4	26	つきては	ついては
14	25	口較的	比較的
15	12	第II層郡	第II層群
35	30	両側が	両側から
37	26	11層	第11層

